

遥かなる峰をめざして

追悼 山崎仁朗先生



まえがき

やまざききみあき

山崎仁朗先生が2017年1月8日朝に岐阜市内の自宅にてお亡くなりになられてから、早いもので9か月の月日が流れました。

この追悼文集は、山崎先生のお人柄と研究業績を偲び、思い出を共有しあうために、生前親交のあった多くの方々からご寄稿いただいて完成したものです。印刷費用につきましては、「偲ぶ会」にご参加くださった皆様から頂いた会費の一部を当てさせていただきましました。ご協力いただいた皆様には心から厚く御礼を申し上げます。

表紙の似顔絵は、山が大好きだった山崎先生が大きなリュックサックを背負って遥かなる峰を目指している姿と、地域社会を研究することに人生を捧げた山崎先生の生き様を重ね合わせてプロの似顔絵師に描いてもらったものです。

本日（2017年9月30日）開催される「偲ぶ会」では、生前親交の深かった方々から、ご遺族の方さえ知らなかった山崎先生の意外なエピソードが紹介されることでしょうか。今回お寄せいただいた、それぞれの追悼文からも、多くの方々から尊敬され、愛された山崎先生の学問とお人柄、そして生前はうかがい知ることのできなかつた意外な一面が浮かび上がってくるのではないのでしょうか。

努力する人は希望を語り、怠ける人は不満を語る。

山崎先生が最後の最後まで研究者として努力なさった姿と、自分の学問を地域社会のよりよい発展のためにささげられたスタンスは、未来社会の希望を語っておられたことにほかなりません。

この文集を読み返すたびに、山崎先生の思い出が蘇り、私たちを励ましてくれるように感じられる小冊子になっているならば、準備に関わったものとしてこれに勝る喜びはありません。

「山崎仁朗先生を偲ぶ会」準備委員 一同

2017年9月30日

まえがき

目次

名古屋大学、学会、研究会など	1
大藤 文夫 小木曾 洋司 交野 正芳 黒柳 晴夫 高橋 明善 都築 くるみ	
中田 實 丹辺 宣彦 羽貝 正美 藤田 栄史 牧野 修也 丸山真央	
三浦 哲司 三須田 善暢 宮下 さおり 宮本 益治 柳田 良造 山田 明	
山田 公平 山本 素世 林 明鮮	
岐阜大学	24
伊原 亮司 笠井 千勢 黒田 学 小西 豊 白樫 久 高木 和美	
富樫 幸一 土岐 邦彦 西村 貢 林 琢也 林 正子 人見 佐知子	
フォン・フラクシュタイン,アレクサンドラ	牧 秀樹
ラッセル、ジョン・ゴードン	和佐田 裕昭
三谷 晋 山口 利哉	
卒業生・学生・大学院生	36
浅野 有香 大野 綾子 小島 友花 坂井 美由紀 佐藤 則子 竹中 悠人	
都築 尚子 橋本 竜一 松井 隆浩 森下 祐衣 矢田 宏昌	
ドイツより（山崎さんへの追悼記事）	41
「オルデンフェルデ新聞」 「ヴェスト・インフォ」 「ハーゼンブック通信」	
ご家族	44
山崎 智子 松下 光子	
略歴と教育・学内業務、社会活動、学会活動	46
研究業績	47
専門セミナー生の卒業論文、大学院院生の修士論文、地域学実習	50

名古屋大学、学会、研究会など

大藤 文夫 山崎先生との思い出

山崎先生との最初の出会いは、もう 30 年ぐらい前になります。山崎先生が学部生、私が大学院生の時です。当時は研究室で毎年地域調査を行っていました。私たちが出かけたのは多治見市でした。学部生が数グループに分かれ、そこに大学院生が付くという構成でした。たまたま私が所属したグループに山崎先生がいました。私の方も右も左もわからない状態でしたが、現実社会が目の前にあり、そこに係わっていくことでリアリティを感じていました。山崎先生たちと一緒に、よく議論し、宴会をしました。

山崎先生の人柄は昔から変わっていないように思います。お付き合いのある方は良くお分かりだと思います。まずは真面目です。かといって堅苦しくはありません。諧謔も十分に解します。人に対しては優しいです。そして何よりも山男でした。毎年、仲間たちと山歩きをしているようでした。どこそこの山にいったといった話をよくききました。よって体も鍛えていました（自転車が友でした）。

ある年に、お土産だといって 1.5 リットルのペットボトルに入った水を持ってきてくれたことがありました。どこの山だったかは忘れてしまいました。何年か後に、新穂高の方に観光（山登りではありません）に行ったとき、きれいな水が勢いよく流れている川がありました。こういうところからわざわざ水を持ってきてくれたのかな…と思いました。また山崎先生が助手の時に、広島からかなりの量のコピーをお願いしたことがあります。嫌な顔ひとつせず、やってくれました。その時のコピーは今も手元にあります。

岐阜大学に赴任してからは少し縁遠くなりましたが、ここ 10 年くらいまた山崎先生とかわることができるようになりました。山崎先生がコミュニティ政策学会のプロジェクトに誘ってくれたことが縁でした。傍から見ても精力的に活動していました。プロジェクトのリーダー、研究会、そして研究成果の出版。次から次へと成果を出していました。わたしも引っ張られるように参加していました。そういう時に、ドイツに行ってきたからお土産だといって、白ワインをもらったことがありました。ドイツワインは甘口というイメージがありましたが、そうではないんだといっていました。おいしかったです。ドイツの友人はブンパニックを酒のあてにして飲むんだそうです。

長く書きましたが、私の中の山崎先生のイメージは学部生の時のままです。髭にはおおわれていませんでしたが…。優しく、真剣なまなざしをもって、世の中をまっとうに生きていく人です。私の手元には山崎先生の思い出とともに、たくさんの研究成果があります。私の中に山崎先生をおいて、私自身これから頑張っていこうと思っています。

(広島文化学園大学)

小木曾 洋司

今年 1 月の初旬、突然の山崎先生の訃報を受け取りました。実感がもてず、時間が一瞬止まったような感覚を覚えています。

昨年夏のコミュニティ政策学会で、山崎先生に会いました。手術後のため痩せておられましたが、相変わらずエネルギッシュな研究姿勢を感じました。それゆえ、今後もこれまでと同様コミュニティ政策学会のプロジェクト研究会、地域自治区研究会で同席するも

のと信じて疑うことはありませんでした。私自身健康の問題もあって研究会から離れていた時期があり、山崎先生に負担をおかけしたことを反省しておりましたのでこれからきちんと取り組もうと思っていました。ところがこういう事態になってしまいました。非常に残念です。

改めて山崎先生が中心になって進められて来た研究会の課題を考えて見ますと「地域自治とは何か」ではないか思います。山崎先生もこの言葉を使っておられますが、この言葉を私が最初に目にしたのは鳥越皓之著『地域自治会の研究』（ミネルヴァ書房、1994、第1章）でした。この概念はそれまで「遅れたもの」とみなされてきた町内会を現代社会の中に位置づけ直す作業から形成されてきたものでした。それゆえ、この概念は日本の町内会を日本の特殊性において捉えるのではなく、現代社会の、とくに地方分権化時代のなかで地域自治の担い手として捉える視点を用意したものでした。それゆえにこそ山崎先生はこの概念を使いながら外国の地域住民組織やその活動と日本のそれとを共通に理解する概念として用いたのだらうと解釈します。この点が私自身の問題意識と重なりあうところでもありますし、地域自治研究会の課題の大きな柱でもあるように思います。その作業の展開を続行できなかった山崎先生の意志を、研究会を通じて引き継ぐことが私たちの仕事だと思っております。

心からご冥福をお祈りいたします。

(中京大学)

交野 正芳

山崎さんとは東海社会学会、日本村落研究学会（以下、村研と略記）を機会として、その存在に接するというお付き合いですので、山崎さんの人格像に全うに迫れるような関わり方ではなく、わずかながらの学会活動を通じてのまさに人格像というより研究者像の、それもごく一端に触れたにすぎない、そのようなわずかな、まさに垣間見たというほどの印象にすぎない内容ですので、歪んだり、偏ったり、はたまた取り違えているかもしれません。いずれにしても私自身の限られた山崎さん像による一文であることをお断りしておきます。私みずから山崎さんに向き合おうとして、彼を偲ぶためのよすがとして、という思いから記します。

取り組んでおられた山崎さんの主題は学会等で同席していた周囲に列する者にとって、上に記したようないわば遠目にもそのイメージは伝わってくるものでした。

追究されておられた「社会」の位相は、地域、コミュニティ、地域自治、地方自治体、住民、実践・活動、などを構成要素とするターゲットを思いつきます。

政策の展開する現場への関与を調査・研究を通して、実践・運動のじっさいと研究者として向き合い、「現場」への関与において問われざるをえない「現実」という自らが構成し、論究したことに発する批判・反批判の場における自らの地歩を示され、それを介しての山崎さん像が結ぶ時機にあった、という受け止めをしています。

「自治」のありかたが研究の到達点として掲げられていたのではないかと拝察します。コミュニティ政策をテーマ構成の軸とされていたと思いますが、そこに凝集するテーマのいくつかとして、ドイツをフィールドとした調査（地域協議会の事例）においては、日本

との比較を念頭におかれていて、日本の町内会＝自治の方向づけをそこから引き出そうとする視点、明治から平成に至る市町村合併を契機として累積されてきた旧行政市町村からなる合併自治体の累積したものに“自治の地層”として着眼されて、とりわけ平成合併を機に設置された「地域自治」を理論的追究の拠点として見出されていたのであろうか、その関心から印象づけられます。同時に鈴木栄太郎氏の自然村・行政村について論及もその文脈において論じられていたのであろうとも。

そのように構想の具体化にむけていくつかの前提として位置づけられた作業を積み重ねてこられたおり、構想されていた「自治」の国家体制における制度的位置づけ（保障）につながりうる実践のありようは具体的な課題として取り組まれていたように思います。その思考が、日本の「近代」の歩みにおける制度的基盤として固有の国家体制の統合原理の実相の究明が、地域における「自治」の実質を問うこととも並行した作業にならざるをえないことを、「地域自治」に即して考える者の一人として、山崎さんがその関心から展望されていたであろう「構想」の到達点を目の当たりにしたかったという思いがつのつています。

私が目の当たりにした山崎さんのもうひとつの貌として、村研大会の会場校としてのマネジメントがあります。あの大会における山崎さんのマネジメントぶりには今思えば人生を賭けられていたのかと思わせるような、役どころの果たし方にそのお人柄の誠実さに裏打ちされているようなさまは、鮮明な記憶としていまも思い起こします。

その先に思い描かれていた「像」は未完のままにあります。そのテーマの共有のなかで、山崎さんが辿り着こうとされていた“確たるもの”は日本という「社会」がまっとうに向かうべき、同時にそれだけに理論・現実における論争的な場を共有することもなる、地平であるのではないか、と思うところです。

(愛知大学名誉教授)

黒柳 晴夫 山崎仁朗さんとの出会い

私が山崎さんの訃報の連絡を電子メールで受けたのは、昨年未からインドネシアのジョクジャカルタ特別州内に滞在し、ジャワ農村の村落自治組織に関する社会学的調査をしていた年明け早々の1月8日のことであった。思いがけない急逝の報に接し、直接お別れをしてご冥福を祈りたいとの思いに駆られ、慌ただしくジャカルタに移動して帰国の途に就いたのがまだ昨日のように思い出される。

私は、名古屋大学文学部出身の社会学研究者の山崎さんが岐阜大学地域科学部に赴任しておられたことは知っていたが、取り組まれている研究について論考を拝読し、直接話をする機会を持つようになったのは、東海社会学会の理事会でご一緒するようになった2008年頃からだった。私は同学会で名前だけの会長などを務めさせて頂いたりしたが、山崎さんには研究企画委員長など種々の重責に就いていただき、市民参加も容認した学会の特色を生かした活力ある運営を持ち前の卓越した企画力で引っ張っていただいた。

しかし、最初に山崎さんを直接知る機会を持ったのは、2006年11月初めに花祭りの里として知られる愛知県奥三河の東栄町で第54回日本村落研究学会大会が開催された時に、彼が白樫久先生と郡上市和良町の調査をもとに「中山間地域農村の定住条件につい



村落社会研究学会・和良大会での
鈴木榮太郎先生の特別展



郡上市和良町での「集落点検調査」と
ゼミ生の皆さん



ての実証的研究」のタイトルで研究発表された時だった。私は、大会の実行委員の責任者として裏方の仕事に就いていたので、研究などに関わる話をする機会も持てないまま最初の出会いは終わってしまった。そうではあったが、人伝に山崎さんは、ドイツにおけるゲマインデ理論による地域社会組織の実証研究に取り組んでいると伺い(2008年の8月だったと記憶しているが、中部国際空港で、私がインドネシアの農村調査に向かう折、山崎さんのドイツ調査の出発に遭遇したことがあった)、またそれまで彼は地域社会研究学会やコミュニティ政策学会を活躍の場としてこられたと思っていたので、上記村研大会でのよく構造化された調査報告を拝聴して、私は、東海地域に今後の活躍を期待できる村落研究学会員がいることを知って心強く思ったことを覚えている。

その私の思いが間違っていなかったことを知らしめてくれたのが、まさに村研の研究史を踏まえてその成果を今日のコミュニティ政策や地域自治の課題に繋げようとした「鈴木栄太郎における自然と行政—地域自治社会学のための予備的考察—」(『社会学評論』2012, 63(3))の論文であった。その成果を踏まえて、山崎さんは2014年11月初めに岩手県宮古市で開催された第62回村研大会で「鈴木栄太郎における自然村理解の展開過程」を発表され、「行政村」が住民の日常的な行為と相互作用の社会空間として固定化されてくるとやがて自然な関係に転化して変質してくるとする鈴木理論の動態的な視点を明らかにして、いわゆる「自然村」概念の再考を迫った研究報告であった。山崎さんは、自身の地域自治論の精緻な構築のために、その後鈴木家の関係者を探し出して鈴木栄太郎が遺した研究ノートなどの貴重な研究資料を借り受け、鈴木栄太郎の農村社会学原理の形成過程の分析を進めていた。彼のこのような精力的な探究心には敬服するばかりである。

翌2015年の第63回村研大会は、山崎さんのお世話で郡上市の和良町で開催された。山崎さんがこの山間の地を大会会場に選んだのは、ここが鈴木栄太郎が岐阜高等農林で教鞭をとっていた時代のいわばゆかりの地のひとつだったからであろう。そしてさらに第54回大会の発表にもあったように、地元和良町の人びととの強い関係を築いてきたからであろう。

山崎さんの思いを込めた大会のエクスカージョンは、バスで関市から武儀町を通り、鈴木栄太郎が昭和5年の夏に美濃地方の山村を歩いてまとめた見聞記「山間行」(紀要『各務時報』、昭和6年7月、第54号)で取り上げた津保川沿いのゆかりの集落を訪ねる企画であった。もちろん鈴木栄太郎が歩いた時代から85年が過ぎて様々に変化はしていたが、当時の様子を想像することはできた。途中、川合や中村などの集落ではバスを降り、山崎さんの案内で見聞録に記述されているゆかりの施設や家の佇まいなどを見て回った。その際にたまたま二人で集落の中を歩きながら山崎さんが、私が現キャンパスに岐阜大学が移転する前の黒野や折立地区で実施した調査結果の一部を『都市問題』(東京市政調査会、1981(9))に発表した拙稿を読んでいることを知り、いろいろ関係した論文に限らず目を通して驚かされた。また、その時に山崎さんが、現在鼻の中にできものができていて加療中で、今も痛みがあり、村研の大会を終えたら治療を受けに行くことになっていると話された。私は、山崎さんが1年前から大会の開催を引き受け、ほとんど一人で準備をされてきたので、その無理が災いしたのではないかと心配して尋ねたのだが、彼は大丈夫だから心配には及ばないといっていた。既にその時に山崎さんが不治の病に侵されていたことを知ったのは、その後山崎さんが入院されたことを私の勤務先の同僚から知

らされた時で、その年の師走に入った頃だったと思う。

上述してきたように、私は、山崎さんと研究上の議論をし、成果を交換し合うようになったのはここ6、7年ぐらい前からであった。インドネシアのジャワ農村で、地方分権化の制度整備が進められる中で、行政村内の住民が統治の客体であると同時に合意形成への参加主体である関係が創り出されてきていることに注目し、行政の補完に留まらない村落自治の再編について研究している私にとって、山崎さんの「地域自治」の研究は非常に示唆に富み、今後の研究成果に期待していた。その山崎さんが、志半ばにして旅立ってしまった。本当に残念なことであるが、今後も彼が遺してくれた論考から学ぼうと思っている。今となっては、ひたすらご冥福をお祈りするばかりである。

合掌

(相山女学園大学名誉教授)

高橋 明善 山崎仁朗さんを悼む

1月8日山崎仁朗さんがなくなった。死の直前最も親しくつきあって頂いた若い研究者である。享年51才、私の長男より若い。早すぎた。他に追悼文を寄せる人がいると思うが、やむを得ざる気持ちで一言追悼文を掲載させて頂くようお願いした。2014年春、山崎さんから鈴木栄太郎師の遺稿が段ボール10箱分が見つかったので整理に協力してほしいと頼まれ、6月に3日間岐阜大学に赴いた。山崎氏は遺稿の活字化と研究に努め村研ジャーナルに掲載すると共に活字化した資料や遺稿を私と酒井恵真、牧野修也氏の所に送っている。

翌年11月彼は鈴木師の学問形成の場である岐阜和良町での村研大会開催を主催した。そこでは上記の資料のほか、勤務した学校に残される記念物も展示した。鈴木氏の農村踏査の跡をたどるエクスカージョンも準備し、若き鈴木氏の学問的営為を会員に実感させた。大会は史上最高150人の参加者を集め、大成功であった。

うれしきや 紅葉は盛り 先師ゆく 路を辿りて 昔を偲ぶ (和良大会)

後で聞けば彼は体調不良だったが、大会が終了まではと検査を先延ばししていたようである。昨年、11月村研大会を前に、山崎さんに鈴木経歴に関する質問と、風の便りに聞いていた健康不安をお見舞いするメールを送った。

返事は即日の内に届いた。返事の中に恐るべき病気の報告がなされていた。昨年11月村研大会が終わると、直ちに検査を受け鼻の癌が発見されたという報告であった。入院治療、再発をくりかえし、片目を摘出したとあった。それでも11月1日ゼミに復帰した事、11月5、6日、東京の彼主催のシンポに出席するという事であった。私は11月3日、夕方から村研萩大会に出席する予定であった。大会とかちあい、あえないので、鼻の癌の怖さは経験からしっていたが、こうした元気さに一縷の望みを託し、お見舞いの気持ちを歌10首に託し送った。

まさか2ヶ月の命だとはつゆほども思わなかった。それにしても、明らかに一年半の村研大会の準備ががんの早期発見治療を遅らし、命を縮めたと考えざるをえない結末だった。私の気持ちは申し訳ない、残念、口惜しいなど言葉では表せない。

彼は行政枠を前提として自然村を考えるとという鈴木自然村理論の再解釈を武器に、現代の地方社会におけるコミュニティ形成研究を進め、すぐれた成果を上げていた、若手の優れた研究者である。蓮見音彦氏も私も近著の中で彼を評価している。村研は貴重な財産を失った。しかも、村研のために彼は命を縮めた。彼が発掘保存整理しライフワークとしようとしていた鈴木師遺稿研究と、途中で挫折した彼のコミュニティ研究をつぐ、後継者が現れることを望みたい。幸い岐阜大学、名古屋大学の関係者が資料の保存について考えてくれることになっている。

山崎さんの師中田實氏から私当てに痛切な哀惜の文章が送られてきている。私も年賀状をもらったのに。

山崎さんのために詠んだ歌の中から数首をあげ、彼を送る言葉にかえたい。

*一年前	最大規模の大会を	主催したるに	何故死にいそぐ	
*若き友	不運の病	便りあり	ただ祈るのみ	なぐさむつらし
*自然村	再解釈で	コミュニティ	再構成の	理論目指せり
*鈴木師の遺稿整理に	協力し	取りわけ親し	この三年は	

(東京農工大学名誉教授)

都築 くるみ いつも一緒に幹事をしていましたね

山崎さんとの出会い

山崎仁朗さんとは 名古屋大学文学部社会学研究室での大学院生時代の仲間です。私が大学院修士課程に入る前に研究生をしていた頃、山崎さんは学部生でした。その後、私が修士課程、博士課程と進み、そのあとを山崎さんも追って、同じ時期に社会学研究室で時を過ごしました。山崎さんは大学院生時代に貝沼洵先生に師事し、その後、文学部の助手を経て、岐阜大学地域科学部へ転出されました。山崎さんが学部生の頃から30年近いおつきあいがありますが、私が愛知学泉大学へ就職した後も、わざわざ岐阜から遠い道を非常勤講師に出向いてくださったこともありますし、私が岐阜大学へ社会調査法を教えに行った時期もあります。お互いに名古屋大学を離れたのちも、いつもお互いに助け、助けられる関係でした。

心に残る思い出・・・大学院生時代

私たちが院生だった頃、社会学研究室は北川隆吉先生が教授でいらっしゃり、本田喜代治先生、阿閉吉男先生、田中清助先生という系譜を継承していました。北川先生のもとには、貝沼洵先生、松本康先生と続き、黒田由彦先生、米田公則先生、河村則行先生が代々助手という布陣でした。佐野勝隆先生、藤井勝先生も一時期いらっしゃいましたし、丹辺宜彦先生、折原浩先生にもお世話になりました。中田實先生は教養学部に所属していらっしゃいましたが、大学院ゼミを指導にいらっしゃってくださっていました。大講座制のあの頃の研究環境は皆、涙なくしては語れない時代ですが、院生仲間との思い出は、ずっと心の中に残っています。研究も調査も、また授業の課題や自分の論文の準備など、常に膨大な作業と締め切りに追われる厳しい日々でしたが、それを乗り切ることができたのは、仲間

との濃密な関係があつて、お互いに支えあうことができたからだと思います。

大学院時代には、普段の授業以外に、夏になると中田實先生のゼミを学外でしました。信州で文献研究のゼミをしたことがあり、そのうちの一日、山登りをしたりしました。そういう時には、山男の山崎さんが、道中、皆に声かけをして励ましてくれたり、おやつ「桃缶」を用意して、皆に糖分補給をしてくれたり、山頂でコーヒーを沸かして飲ませてくれたりと、懐かしい思い出が残っています。

また、毎年、研究室全体でおこなっていた大規模地域調査のあとの報告書の作成時期には、夜遅くまで作業をし、途中で近くのラーメン屋さんへ行ってラーメンを食べ、また研究室に戻り、大学の門限まで一緒に作業をしたりしました。山崎さんたち男性陣は、下宿に戻ったあとも、よくビールを飲みあかし、ある先輩の下宿の床にはビール瓶がごろごろ転がっていたというような武勇伝を聞いたこともあります。年末には研究室の大掃除をし、その後、雑巾をゆすいだ同じ洗面台で、白菜などの野菜を洗い、古いストーブの上で鍋料理をして食べたことも懐かしい思い出です。そういう時にも山男の山崎さんの経験がよく生かされ、大いに盛り上がったことを思い出します。今、美しくリフォームされ、耐震補強もされた文学部の研究室からは想像もできないですが、朝、登校するとまず共同の“読書室”へ行き、そこで作業をしたり、授業の準備をしたり、時間になれば院生ゼミをしたりしました。4～5人で共同の院生部屋もあり、自分の机もありましたが、古くて汚い、蔵書に囲まれた“読書室”が貴重な空間でした。今もくっきりとその記憶がよみがえります。朝から夜まで、一日中学校にいて、作業をしないと日々の課題が消化できていかない…。そういう時期をお互いに励ましあい、先輩や助手さんに指導してもらい、愚痴を聞いてもらいながら、共に過ごしたのです。

心に残る思い出・・・助手時代、その後

助手になってからの山崎さんは、社会学研究室の運営をするための膨大な事務処理をしつつ、自分の研究もし、また学生の面倒もみつつ、多忙な日々を過ごしていました。ある時、「ちょっとごめんね」と言って、助手部屋のドアを閉めると、中からラジオのドイツ語講座の講義が聞こえてくることがありました。その後のドイツ留学につながる努力を、少しの時間を見つけて、コツコツとしていたのです。ドイツ留学を果たした後に、その成果を披露するというので、大学近くのレストランで、皆にスライドを見せて説明をする「報告会」をしてくれました。日頃の努力が報われて良かったと本当に思いました。その後も数回ドイツへは赴いており、多くの研究者仲間や友人ができたと聞いています。

その後、お互いに就職した後、「〇〇先生を囲む会」や、誰かが就職が決まると「お祝いの会」をよく開催したのですが、その時はどういうわけか、「山崎・都築」コンビで、幹事をおこなうことが多々ありました。山崎さんは、学部生の頃はどちらかといえば、“物静かな山男”、という感じでしたが、助手になり、事務処理能力、情報収集能力、全体を見渡す能力、調整能力、交渉能力などが、磨かれ、思う存分発揮されたのでしょうか。助手時代が終わっても、集団の面倒をみるという立場にたつことが多かったようです。科学研究費などの研究代表者としての仕事が待ち構えていたようで、その後は、仕事に忙殺されていたようでした。

しかし、ある時「マンションから長良川の花火がよく見えるから、花火を見に来て」と院生時代の仲間に連絡があり、ある一夜、長良川沿いの山崎邸に集い、花火を見つつ楽し

いひと時を持ったことがありました。多忙な日々の中でも、他人への配慮を忘れず、古い仲間を忘れず、人の面倒をよく見る人でした。

その頃は、マンションから大学まで自転車通勤し、授業後は「そのまま帰宅しないで、帰路の途中にあるプールへ寄ってひと泳ぎし、その施設の中で少し読書し、それから帰るんだよ。自分なりのリズムができ、とっても良い時間を過ごしている。」と言い、「最近、鈴木栄太郎を読んでいるんだよ」ということでした。鈴木栄太郎研究が、その後結実したこと、和良村での展示に結び付いたことを思うと、その頃の充実した顔が忘れられません。今も毎日思い出します。

今回、この「山崎さんを偲ぶ会」のご連絡をいただいた時、不思議で仕方ありませんでした。あんなに人の面倒を見、企画をし、場所を取り、名簿を作り、出欠を取り、料理を考え、式次第を考え…と一緒にやってきた人が、主人公になってしまい、「都築さん、〇〇は、どうなっていますか？」というメールが来ないのです。病を得、厳しい治療の間にも、仕事の采配をし、自分の病気の状況、治療の状況をメールで配信し、元気に振舞っていましたので、今もその山崎さんがこの世にいないとは信じられないのです。

山崎さんに最後に会ったのは、昨年 2016 年 7 月の東海社会学会の時でした。午前中の自由報告を聞くつもりで参加した私は、まさか山崎さんが来ているとは思わず、また山崎さんも私が来ているとは思わず、お互いに再会を喜び、午前中の報告は一つも聞かず、数時間、会場近くの廊下の一隅で話し込んでしまいました。

その時には、ひげをそり、髪を切り、風貌も少し変わっていましたが、相変わらず「体調が良いから、少し泳いで体力をつけようと思っているんだ」と言うのです。「いえいえ、体を冷やすのはやめたほうが良いのではないの？ 今は休養をした方が良いよ」と言うと、「学校へも自転車で通っている」と言うので、「それも疲れすぎないように気をつけてね」と言ったりしました。（東海社会学会の前の週には東京まで別の学会へ行って来た、と言いますし、夜の懇親会にも出た、と言うのです。）「本当に気をつけないと…。がんばりすぎないでね」と言うと、「うん。もうあまりがんばりすぎないようにしようと思っている」と言っていたのに…。

思えば、お互いに就職した後は、東海社会学会でおこなうインターンシップで会ったり、幹事をしたりと、研究以外の周辺的なことで会うことが多かったようです。気軽に何でも相談できる関係でした。院生時代を知っている、30年の時を共有できる人はそう多くはいません。会えばいつでも昔に戻れ、社会学という一番心を燃やした仕事やそこから得た視点で、社会を語る痛快さを共有できる、本当にかげがえのない仲間でした。

今は千葉県のご両親の眠るお墓で、ともに眠っていると聞きました。山崎さんを思う時、名古屋大学の古い共同読書室や院生室、岐阜のマンション、岐阜大学の研究室、奥三河へ数人の研究者と「宮本常一を訪ねて」行った小旅行のこと、夏の海辺での合宿など、思い出は尽きません。山を愛し、お酒を愛し、社会学を愛し、全力で生き抜きましたね。今は、「故郷へ帰ったのですね。ゆっくりとしてくださいね」と心の中で祈っています。合掌。

(元愛知学泉大学教授)

中田 實 遅すぎた言い訳

山崎さんは、その著作の展開の過程で、拙論を、基本のところでは受け入れつつも、現実の問題の展開に関わるところでその不十分さを見抜き、批判されてきた。至らぬ拙論を検討してくれていることは有難いことであり、しかし行き違いになっている点については、いつか議論しなければと思いながら、それができないで終わってしまった。いつも先へ先へと研究をすすめていく姿をみていると、この小さな行き違いについては、「そのうちに」と先送りするしかなかった。反論できない状況で、いま一方的に説明してもフェアではないが、「遅すぎた言い訳」を少しだけさせていただきたいと思う。

山崎さんの拙論に対する批判は、注の形でされることが多かった。それは、氏の文献（山崎、2013）の注5では、「この考え方にもとづいて、中田 実 は「生活地自治体」論を唱えたが（中田、1993）、これが基礎自治体との関係で、どのような権限を担うのかという分権論までは詰め切れなかった。」（p.20）と書き、また、別の文献（山崎、2014）の注22では、「町内会＝自治体論を発展させた・・・中田 実（1993）の「生活地自治体」論においても、「地域管理の『公』的性格」や「地域社会の重層性」（同：45）は指摘されたものの、この生活地自治体が、基礎自治体との関係で、どのような権限を担うのかといった分権論まではつめきれていない。」（p.21）と、同様の問題を指摘されていた。

ここで「生活地自治体」が、現実の、後期資本主義国家の内部での制度とみれば、そのような「自治体」の想定はむしろ幻想的な主張であり、そこでの分権の内容を特定すること自体もナンセンスという方が近いであろう。事実、「生活地自治体」という概念は地域の固有権的自治についての理念的な表現であり、それを担う住民主体の成熟との関係で形成されるものと想定されていた。各地域は自然的、地理的、歴史的条件の多様性と固有性をもっており、それらの条件を活かしてその地での人びとの生活を維持発展させていくことが、地域自治の基本的な要請であり、それを保障するのが固有権としての自治であり、それによって立つのが「生活地自治体」であった。その意味では、現実の行政機関が地域社会の運営にかかわるどのような政策や制度化をすすめても、完全に自治に適合的な結果をえることは困難であり、これはむしろ「制度化」の背後にある地域自治の多様性発現の条件の方に注目する議論であった。

このように、「生活地自治体」に関わる私の関心は、制度化にもかかわらず生まれる地域個性の方であった。その意味では、山崎さんの注目した鈴木榮太郎の自然村理解の「回帰」論（山崎、2015）とも関わる視点に近いともいえよう。しかし、近年の地方分権と連動した「自治論」は、実質的な意味では行政事務の外部化を図ろうとする面をもつことも否定できない。もちろん、地域社会の側でできることについては最大限にすすめることが、地域住民の生活力を高め、住民の幸福を増進する面があることは確かであり、ここにも住民自治の特徴が現れている。それだけに、行政側が地域住民組織の形や活動の内容に枠組みを課し、これを強要するような自治の「制度化」は地域の自治の力をゆがめ、それへの対応で、自治の力を削ぐことになる面も危惧される通りである。近年、各地で見られる地域住民協議会のような制度も、これに適合的な地域があることは確かとしても、地域ごとに受け止め方は多様であり、しかもその違いは、制度化への遅れとしてでなく、尊重すべき地域個性の表現として受け止めるべきものとして考えられる。「生活地自治体」論は、実態の組織規

定というより、あるべき自治体の姿を表現するものとして提起した概念であった。

現在、グローバル化がすすみ、従来の国家では把握しコントロールできなくなっている領域が生まれ、拡大してきている。軍事面や税制面、さらには地球環境面でも、もはや旧来の個々の国家の権限ではコントロールできずに、新たなグローバルな地球管理組織の出動が求められるようになってきている。U.ベックのいう「世界リスク社会」(1999 = 2014)化である。この状況のもとにあっては、コスモポリタニズムが地球政府の機能を果たすようになり、国家は相対化されていく。坂本義和(2011: p.229)によれば、その時、国家は「一種の地方自治体ともいうべき権限の体系」として存続することになる。この状況下では、地方自治はいっそう広範に、各地域に独自の個性的な姿で実現できるようになり、そこでは、すべての地域組織が、他の地域組織と連携しつつも、それぞれ必要とするまとまりと権限とをもって、まさに「生活地自治体」として存続できるようになるであろう。それが現在の「基礎自治体との関係でどのような権限を担うのか」といった分権論まではつめきれていない」という指摘と行違った背景である。

こうした拙論は空論なのかもしれない。しかし、山崎さんから指摘をいただいた時点で、現代の問題としてどう生かすのかを検討することはできたであろう。日常の山のような業務と、最後の段階では、痛みに耐えながらもつねに復帰の予定を立てていた状況を思い出せば酷な課題であるが、その時期を失ってしまった。ちゃんとした説明もできずに来てしまい、ごめんなさい。

【文献】

坂本義和、2011『人間と国家』下、岩波書店

中田 実、1993『地域共同管理の社会学』東信堂

ベック、U.、1999 = 2014『世界リスク社会』法政大学出版局

山崎仁朗、2013「地域自治をどう考えるか」山崎・宗野編『地域自治の最前線』ナカニシヤ出版

同、2014「なぜ、いま、自治省コミュニティ政策を問い直すのか」同編著『日本コミュニティ政策の検証』東信堂

同、2015「鈴木榮太郎における自然村理解の転回過程について」日本村落研究学会編『村落社会研究ジャーナル』43

(名古屋大学名誉教授)

丹辺 宣彦 ありし日の山崎先生を偲んで

山崎先生と私は、名古屋大学に助手と新米講師として1994年春同時に赴任した「同期生」です。当時の社会学研究室はまだ文学部にあり、助手を入れて4人(うち一人は兼任)だけしか教員がいませんでした。じつは繊細でありながら、いかにも気さくな山男といった感じの若き山崎先生は、学生たちの兄貴分といった感じで研究室の束ね役になり、裏庭で焼き肉パーティーをやるときもいつもの軽装で取り仕切っていました。当時の研究室は大黒柱だった北川隆吉先生が退職された後の不安定な時期で落ち着かず、研究・教育が必ずしもうまくいっていない時期でした。ある晩、珍しく二人で飲もうということになり、本山の安酒場で遅くまで研究室の状況や中京圏の社会学研究の不振ぶりについて愚痴をこぼしたり、どうしたらいいんだろうねと延々話し合ったことがありました。若い講師と助

手ではなにもできず、もちろん結論は出ませんでした。その晩のことは妙に鮮明に記憶に残っています。

優秀だった山崎先生は3年ほどで岐阜大に転出され、水を得た魚のように地域研究・ドイツ研究で活躍するようになっていきました。お忙しかったようですが、2006年末でしたか東海社会学会の準備会合が立ち上がった時には真っ先に駆けつけてくれ、賛同して積極的に動いてくれました。紆余曲折の末無事設立され、軌道に乗った時には「あの晩のことを憶えていますか」と喜んでくれたのが印象に残っています。

その後私の方は理論研究から転じて豊田の地域研究を手掛けるようになり、調査データをもとに、自動車産業の長期的繁栄・存続が、従業員たちの定住化をうながし、特異なタイプの都市空間と公共性を生み出しているという知見を得て発表するようになりました。トヨタ自動車に批判的な従来の左派的研究とは異なるスタンスをとったため、山崎先生も言葉にはしませんでした。「こいつはなんでこんな研究をするようになったんだ」という目でこちらを見るようになりました。いっしょに調査をしないかともちかけたときも、やんわり断られてしまいました。しかし、『豊田とトヨタ』という本を2014年に献本した後、ある会合で会ったときに駆け寄ってきて、「終章まで読んでやっと分かりましたよ。最初からああ考えてやっていたんですね!」と言ってくれました。彼も住民の自治力に期待を寄せ、晩年左派の研究者からひどい書評を書かれていましたが、くじけることはありませんでした。いまとなってはよい思い出です。

身体頑健に見えた彼ですが、じつは「短命の家系」だと若いときから言っていて、残念なことにその通りになってしまいました。いっしょに長い航海を続けていた僚艦の船影が突然消えてしまったような寂しさと喪失感を感じます。しかし東海社会学会ができ、名古屋大学の研究室も改組で充実し、彼の研究への思いを、多くの仲間や後輩が受け継いでいてくれるかたちが整いつつあります。謹んでご冥福をお祈りしたいと思います。

(名古屋大学)

羽貝 正美 山崎先生を偲ぶ

山崎先生が旅立ってから8ヶ月。今でも信じられない。地域自治区を対象とした調査・研究をつうじてお目にかかり、その後さまざまなかたちで研究交流ができたことをなつかしく思い出す。とくに、ニーダーザクセン州のコルンラーデというゲマインデを中心にしたドイツ地方自治の現地調査については、ついに山崎先生と一緒に現地に赴くことはかなわなかったが、その後の私たちの共同研究は山崎先生の助言がなければ一歩も前進できなかった。改めて心から感謝とお礼の気持ちをお伝えしたい。

今年も、8月末の4日間、コルンラーデの調査にあたることができた。市長のアンネ・リンデマンさんにはずいぶんお世話になった。彼女もまた山崎先生の問題意識、その調査・研究に触れ、そして何よりもその人柄に接し、彼に全幅の信頼を寄せていたコルンラーデ市民のひとりである。彼がドイツで結んだ人と人との信頼の絆にどれほど助けていただいていることか。ドイツにいくたびに、そのことを思う。

昨年11月はじめ、東京経済大学で開催された国際シンポジウムにも顔を見せてくれたときのことも思い出される。術後、まだまだしんどいなかで、満身創痕の体をだまされ

し来てくださったのであろう。正直、無理をさせてしまったという気持ちが残る。唯一の救いは、旧知の、いわば研究の同志でもあった上越市の佐藤忠治さんと会場で再会し、笑顔で嬉しそうに話す姿を見せてくれたことである。そしてコルンラーデからお呼びしたリンデマンさんとの再会がかなったことである。後日、「どれほど嬉しかったことか」と、とリンデマンさんからお気持ちをお聞きした。

山崎先生がドイツに残した研究の足跡を思うとき、研究者の仕事は孤独ではあるが、人と人との信頼関係なくしてはありえないことを改めて思う。12月には、前向きに進んでいきたい旨の手紙をご家族の写真とともにリンデマンさんに送られていた。ドイツ語通訳を務めた方にも、感謝の言葉とともにシンポに参加できてよかったとのメールが届いている。

信念をもって、謙虚に、誠実に教育・研究に向かい、何よりも人を大切にする方だった。彼が残してくれたものを深く胸に刻み、心からの感謝の気持ちとともに、ご冥福をお祈り申し上げます。

(東京経済大学)

藤田 栄史 故山崎仁朗氏の思い出

故山崎仁朗氏とは、2007年秋に始まった社会調査インターカレッジ発表会、そして翌年に発足した東海社会学会の場で毎回顔を合わせ、親しく話をするようになった。大きなリックを背負い、立派な髭をたくわえ、大きな声で発言する姿からは、活気あるアカデミックな研究者という雰囲気が溢れていたことが印象に強く残っている。

山崎氏とは、同氏が名古屋大学の大学院生や助手であった時にも顔をあわせる機会があったはずなのだが、その時期の山崎氏との交友の記憶は残っていない。山崎氏は、東海社会学会設立を呼びかけた主要メンバーの一人であり、同学会発足時には研究企画委員長として同学会の研究活動をリードする重責を果たした。東海社会学会の理事会・研究大会や社会調査インターカレッジ発表会に出て行くと、山崎氏と必ず顔をあわせることができ、話をするようになった。

ここ数年、私は体調を崩し、東海社会学会の行事に欠席し続けていたため、山崎氏が闘病中であったことを全く知らず、元気に活躍し続けていると思い込んでいたところに、逝去を知らせるメールが突然舞い込んだという状態だった。

日本の地域自治を専攻する山崎氏と労働・経営の領域にもっぱら焦点をあてて勉強している私とは、実証研究の対象があまりに離れており、接点がないようにみえる。しかし、東海社会学会でテーマに取り上げられた、東海地域の「伝統的・共同的な社会関係の相対的な安定性」の持つ意味と「安定性」の構造変化を把握するという課題は、二人にとって共通する議論が交わせる関心事であった。

この課題を東海地域に限定されたものではなく「普遍的」な視角から研究すべきだと山崎氏は主張していた。この研究視角は、東海地域を主たるフィールドにしつつも、自然村と行政村との相互浸透という問題設定を重視しながら、日本の「地域自治」にかんする調査研究を展開した山崎氏の研究成果として結実しようとしていたと思う。

私がまったく目を通すことができていない山崎氏の研究成果に、日独比較を意図したドイツの地域協議会や市民団体の実証研究がある。また、山崎氏は地域自治にかんする基礎

的な理論研究として、ヴェーバーによる「近隣ゲマインシャフト」「ゲマインデ」などの社会学的概念にまでさかのぼった検討を加えている。こうした社会学的基礎概念の検討は、山崎氏が助手時代に名古屋大学へ赴任した折原 浩先生との議論・研究交流が生かされていると聞く。「普遍的な」課題として理論的・実証的に問題を徹底して考察しようとする山崎氏の姿勢がここに貫かれている。「活気あるアカデミックな研究者」という私が抱いた印象が正しかっただけに、山崎氏の早過ぎる逝去が惜しまれてならない。

(名古屋市立大学名誉教授)

牧野 修也 鈴木榮太郎先生を通じての出会い

山崎仁朗先生先生と初めてお会いしたのは、数年前の日本村落研究学会（通称、村研）の大会であった。この学会は、合宿形式で大会を行うという特徴があり、初対面の人とも同室になることも少なくない。偶然のことではあるのだが、山崎先生と同室になり、私の出身校が東洋大学であり、指導教員の一人が鈴木榮太郎著作集の編者の一人であったことから、鈴木社会学についてお話をさせて頂いた。

その時のことをきっかけに、村研や地域社会学会でお会いする度に、お声を掛けて頂くようになった。そうした関係が幾年か続いた後に、2014年に早稲田大学で開催された地域社会学会の会場で、鈴木榮太郎先生の蔵書や遺稿等を、山崎先生がご遺族からお預かりしている話を伺った。その際、先生から、それらの蔵書や資料を整理するとともに、研究資料として活かしていこうという計画の企画にお誘い頂いた。そして、そのお誘いを受け、高橋明善先生と酒井恵真先生とともに、岐阜大学の研究室に寄せさせて頂いた。その際に、山崎先生の鈴木榮太郎先生の社会学の理解を大切していこうという気持ちを、改めて感じさせられたことが、思いされる。それは、鈴木榮太郎先生の議論を、単なる学説史としてではなく、現代の地域社会研究に接続していこうとするものであり、古典を読むということの意味を教えられたように思えた。

2015年には、山崎先生を中心とした岐阜大学の皆様のご尽力で、岐阜県郡上市和良での村研大会を開いて頂いた。その際にも、エクスカーションで、鈴木先生が、かつて歩いた奥美濃の道をご案内頂き、岐阜高等農林時代の鈴木先生の歩みをきちんと押さえられていることに敬服させられた記憶がある。鈴木先生の業績だけではなく、日常での生活や地域社会との関わり、岐阜高等農林での教師としての歩みをも射程に入れた鈴木研究に、これもまた学びを受けた。

こうした鈴木先生へのアプローチの仕方は、山崎先生の地域社会の理解の仕方そのものであったのだろうと思う。先生の学問の全貌を理解するまでには至らないが、鈴木先生についての研究は、これからの我々に与えられた宿題のように思う。

あまりにも早すぎる訃報を残念に思うとともに、先生がやろうとされたことの一部でも継承していきたいと、僭越ながらも思っている。

最後になりましたが、山崎仁朗先生のご冥福を心よりお祈りさせていただきます。

(神奈川大学非常勤講師)

丸山 真央 後続の研究者の一人として

2000年代のはじめのころ、私が市町村合併の研究をしようと思い立ったところ、「それは行政学や財政学のテーマであって、社会学でやるのはどうなのか」とやんわりと止めてくれた人がありました。当時はそんな社会学観に反発を感じましたが、今となっては、駆けだしの院生への助言という点ではたしかに適切なものであったのかもなあという気もしています。それはともかくも、修士課程に入ったばかりの院生は当然悩むことになりました。

山崎仁朗先生に初めてお目にかかったのがいつだったのか、正確な記憶はありませんが、当時動きはじめていた「平成の大合併」に早くから関心をお持ちの数少ない社会学者のお一人でしたので、うじうじと悩みを抱える院生が合併がらみの研究発表をした学会大会で声をかけてくださったのではなかったかと思います。「やっぱり地域自治体に注目すべきですよええ」と、明るい大きな声で話しかけてくださったことを、今も鮮明に覚えています。山崎先生が地域自治の社会学という分野を精力的かつ情熱的に切り拓かれていくのをずっと後ろから拝見してきて、どれだけ励まされたかわかりません。

傑出したリーダーの突然の訃報に、呆然自失するしかありませんでしたし、それは今も変わりません。ただ、たとえ微力であっても研究を前に進めることが、後続の研究者にできることなのではないのかと、最近やっと少しずつ考えられるようになってきました。上越の地域自治体の調査現場をはじめ、多くのところで学ばせていただいたことに少しでもお返しをするためにも、私にできることはそれしかないだろうと思っています。

(滋賀県立大学)

三浦 哲司

今から7年前に、名古屋での研究会にお呼びいただいたのをきっかけに、山崎先生とはコミュニティ政策や地域自治体の調査・研究で、毎年ご一緒してきました。私が名古屋に就職が決まったときにも、「これで一緒に調査やゼミ交流ができますね」と喜んでくださったことを、今でも思い出します。

実際に、岐阜大学山崎ゼミと名古屋市立大学三浦ゼミとで、2015年夏には新潟県上越市牧区の集落調査を実施しました。片道8時間の移動中の会話、現地で地域の方々に寄り添って聞き取るインタビュー、深夜まで語り合う地域の方々との懇親会など、今となってはそれぞれが貴重なひとときであったと実感しています。

日本の地域自治を取り巻く状況は、現在も課題が山積しています。山崎先生の遺志を受け継ぎ、調査・研究を通じて、地域で暮らす人々を少しでも幸せにできればと思っています。

(名古屋市立大学)

三須田 善暢

私は山崎先生とは研究上の系譜関係はございません。先生が鈴木栄太郎の遺稿をお使いになって研究されているのと同じように私も有賀喜左衛門の遺稿その他を使って研究をしていること、2014年の岩手県宮古市田老町での村研大会で先生と同じ部会で報告させていただいたことで関わりがあった程度にすぎません。そのような私が追悼文を書かせていただくのも場違いかと思いますが、これも一つのご縁と思いこの文をしたためさせていただきました。

先生の鈴木論で印象的なのは、行政村と自然村を固定的・二項対立的に把握するのではなく、それらが相互に影響を与え合っていくという動的な理解をされていることです。そのことは、『国民社会学原理ノート』に明示的・強調的に描かれていることではありませんが、『日本農村社会学原理』に力点を置いて読んでしまうと、そこを見落としてしまう研究者が多いのだと思います。そうした点を、鈴木遺稿を踏まえて実証し、独自の「山崎理論」へつなげようとしている姿勢を、「鈴木栄太郎における「自然」と「行政」」（『社会学評論』第63巻第3号、2012年）を読んで新鮮に感じました。くわえて、2015年の岐阜県郡上市和良町での村研大会エクスカージョンでは、鈴木踏査地を訪問し、大会会場に遺稿類を展示するといった「マニアック」な企画には大変興奮して、多くの質問をさせていただきました。いずれ私自身の有賀研究が進んだら先生に深く教えを乞いたい、と考えておりました。

大変おこがましい限りではありますが、先生の研究上の想いの幾分かを受け継いでいけたら、と考えております。

(岩手県立大学)

宮下 さおり 山崎仁朗先生へ感謝をこめて

山崎先生に初めてお会いしたのは10数年前のことだと思いますが、先生とお話できた機会はほんとうにわずかでした。2016年の東海社会学会大会でお会いしたのが最後となってしまいました。雑談のようなかたちで私の研究テーマをお話したときに、面白いと評価してくださりつつ、研究の方法論としてのりこえるべき課題を指摘して下さったことが、今でも心に残っています。きっとこれまでも、先生はそうにして後進をはげまし育ててこられたのだろうと拝察します。もっとお話ししたかった、それが私の正直な気持ちです。山崎先生から教わったことを胸にとめ、これからも自分ができること・なすべきことは何か、悩みながら、精一杯がんばっていきたいと思います。誠にありがとうございました。どうか、安らかに眠りください。

(名古屋市立大学)

宮本 益治 山崎さんの思い出

あの山男が僕より先に他界するなんて信じられない。貝沼先生を中心とした調査研究で北海道を歩き回った折、40キロもの荷物を背負って山登りをする話を聞かされた。髭と髪の毛が連続した顔立ちが豪放に笑っていた。春先の網走の雪の夜、そして北見の大平原。

絵模様のような記憶がよみがえってくる。

山崎さんは名大では僕の7年ほど後輩になるだろうか。上記の北海道での調査活動まではあまり交流はなかった。その後は中田先生の国際科研チームで山崎さんと中国に同行する機会があった。中国語の世話から始まり細やかな気配りをいただいた。まさに髭の中の顔がまたも豪放に笑っていた。僕をつまらぬダジャレにも丁寧に対応してくれた。申し訳ないことをした。

その後東海社会学会の創立時の理事として名を連ねた。彼は庶務理事としてまさしく東奔西走の活躍だった。もう10年が経つ。「疲れを知らない山男」のイメージそのままに社会調査インターカレッジの発足から定着まで尽力された。一方で学生を育てることへの歯がゆさをかみしめながらも、他方で現代的であることだけにコミットしきれない彼の奥行きのようなものを学ばせてもらった。

どちらかという僕は山崎さんから質問せめにあっていたような気がする。それは僕への批判でもあり彼自身の自問自答のようなものだったのかもしれない。いまそんな回想を試してみた。比率で言うと「批判9：自問自答1」といった関係だが、それはなぜ「社会福祉を研究するのか」に関してであったような気がする。社会福祉研究は結局は理念や目標に関する議論であり微妙に実態から遊離したままで推移することを運命づけられているのではないか。そう批判されたような気がする。ただ、法則性を見出そうとして苦闘する社会学の在り方が社会福祉研究の宿命とどこかで共鳴している。山崎さんは消化不良を覚悟でそう沈思していたようにも思えた。

『降りてゆく人生』という映画があった。生涯現役という「昇りつめる人生」もよいが、大概の人生は最終的には「降りて」ゆく。その折にどれだけ多くの人、運動や活動、組織・団体への思いを共有していけるのか。どんな未来社会の展望を描きながら降りていくのだろうか。

病との闘いを潜り抜けたら、もう一度一緒に「昇って」みたかった。 合掌

(東海学園大学)

柳田 良造

山崎先生の訃報を知り、驚くとともに非常に残念な思いです。

山崎先生と初めてお会いしたのは、確か私が岐阜市立女子短期大学に赴任してきた2008年の6月に、友達に教えられて川原町の町家2階を会場にした落語会に行った時です。その時に司会をされていたのが山崎先生で、普段使われていない町家を掃除し、寄席の場の会場づくりを準備したことなど裏話も披露され、当日の司会もされるなど、大学の教員とは思えないフットワークの良さが印象に残りました。

よくお会いするようになったのは鞆屋町の町家で行われていた月1回の景観サロンの会合です。会議での議論や終わったあとの飲み会でよくお話をしました。景観サロンの会のテーマは岐阜市内の金華伊奈波地域のまちづくりや町家再生で、そういう流れで2010年には、金華地区の空き家調査を岐阜大学の学生と行い、山崎先生とも本町地区の空き町家を訪ね、所有者へのヒヤリングもご一緒しました。景観サロンの後の飲み会（それが楽しくて出席していたようなものですが）、ほとんどは雑談の飲み会のなかで、一回だけド

イツの地方都市での社会調査、特に地域自治のことをお聞きしたことがあります。興味深い話で私も建築学の分野でまちづくり、地域のことを研究・実践しており、もっとお話を伺いたいと思っていたのですが、機会はその一回だけになりました。

山崎先生が鈴木栄太郎の農村社会学研究に強い関心をお持ちだったことを知ったのも亡くなられてからです。鈴木栄太郎は戦前、旧制岐阜高等農林の教授として、戦後は北海道大学文学部に移り、社会学、特に農村社会学の分野で大きな足跡を残した研究者です。私自身は大学院時代に先輩から鈴木栄太郎のことを教えられましたが、その後、鈴木栄太郎とは逆のルートをたどって札幌から岐阜の大学に移ることになりました。北海道に居た時、近代期の北海道開拓の研究をテーマにしている、散居の入植形態から農村のコミュニティ形成が遅れたと言われる学説に対し、鈴木栄太郎を読み返した記憶があります。その後アメリカの中西部開拓の調査にも行くようになり、鈴木栄太郎の中にアメリカの農村都市社会学者のソーキンや、ラーバンコミュニティという概念が今から80年も前に登場してことを知って改めて驚くものでした。鈴木栄太郎については山崎先生と議論したいことが山ほどありました。

まだまだこれからやりたい仕事がおありだったと思います。なすべきことをかかえて逝ってしまうことの無念さを思うと言葉がありません。一番残念だったのは山崎先生ご自身だったと思います。ご冥福をお祈りいたします。

(岐阜市立女子短期大学名誉教授)

山田 明 山崎仁朗さんの「思い出」

山崎仁朗さんとは、教育と研究の両面で「かかわり」がある。山崎さんを偲びながら、私なりに「思い出」を語りたい。

教育面では、なんといっても「社会調査インターカレッジ発表会」(略称インカレ)が印象に残っている。主に社会学を学ぶ学生が、社会調査の成果を報告し議論しあう場が、インカレである。私は名古屋市立大人文社会学部現代社会学科で「社会調査実習」を長年担当し、インカレをめざして学生にハッパをかけてきた。

山崎さんは岐阜大から多くの学生を引き連れ、いつも大きなリュックを背負い、インカレ会場にあらわれた。一見「野武士」のような風格で怖そうだが、学生に優しく指導している姿が目につく。あれは岐阜大が会場だったインカレのときだ。当番校の責任者として、細かなことまで学生たちに指示を与えていたのが忘れられない。懇親会の場で、私が「もうインカレ」などと、いつもの寒いダジャレを飛ばしたが、彼らしく喜んでくれたようだった。

山崎さんは地域社会学の研究者であり、私とは専門は異にするが、思い出に残ることが二度ほどある。

一つは、2009年7月の第2回東海社会学会シンポジウムである。山崎さんが担当理事として、私の研究室へ打ち合わせに。例のように大きなリュックから資料を取り出し、シンポジウム「東海社会の『地域力』を問う」企画をじつに丁寧に説明してもらった。山崎さんのコーディネーターのもと、私も「東海社会の構造変化と『地域力』」というテーマで報告した。『東海社会学会年報』第2号でシンポジウムが特集され、山崎さんの「特集に寄せて」とともに、私の報告要旨も掲載されている。

山崎さんは「特集に寄せて」の最後に次のように書いている。——「全国の縮図」とし

での「東海社会の『地域力』を問い直す」ことは、地域的な限定を超えた普遍的な課題の追究でもあることに、改めて気づく。……本学会は、東海社会を拠点にした研究・教育・実践活動を基本にしつつも、地元の地域研究に限定することなく、より多様なテーマを、普遍的な視野で問い続けることが求められよう。

もう一つは、山崎さんと宗野隆俊さんが編集した『地域自治の最前線 新潟県上越市の挑戦』を東海社会学会年報編集委員会からの依頼で書評したことだ。400 ページを超す大著の山崎さん編著『日本コミュニティ政策の検証 自治体内分権と地域自治に向けて』とともに、共同研究の成果をじっくり読んだ。こちらは最近のことでもあり、記憶もまだ鮮明だ。すこし詳しく紹介したい。

山崎さんは編者あとがきで、本書の意図を次のように述べている。——地域自治区制度は、合併によって失われた自治を、不十分なかたちで埋め合わせる弥縫策にすぎないとか、合併前の旧自治体のレベルに設定されて、草の根の地域コミュニティからは乖離しているなどと批判されがちだけれども、こうした批判は、制度のかたちだけをみて、それが適用されている実態を無視した表面的なものにすぎない。……住民にとって身近な自治を制度的にも保障することで、意思決定過程への参加の機会を広げたほうが、住民の主体性が発揮しやすくなり、住民がよりよく生きること、ひいては市全体の魅力を高めることにもなる。「上越市の挑戦」には、これまでの地方自治のあり方を根本から変える可能性が秘められている。

こうした批判に対する「批判の検証」が、本書を評価するうえでも重要な論点になるのではないか。本書に対する若干の「注文」を2点ほど述べたが、1点だけ紹介しておく。

上越市の広域合併をどう評価するか。山崎さんは合併によって大規模化した自治体では、「自治体よりも下位の地域コミュニティ・レベルの自治（狭域の地域自治）が、なんらかのかたちで保障されなければならない」とする。その一方で、本書後に刊行された『日本コミュニティ政策の検証』で、山崎さんは序章で「平成の大合併で基礎自治体の範囲がさらに拡大し、効率性を求めて行財政が縮小する傾向にあるなかで、そうしてできた「公共の空隙」にたいして、地域コミュニティ・レベルの自助や共助だけで埋め合わせできないのは明らかである」と述べている。

全国でも最多の広域合併をした上越市において、基礎自治体の「公共の空隙」がどのように、どれだけ地域コミュニティ・レベルの先進的な活動によって埋め合わされているか、今後とも注目していきたい。

2014年5月、日本地方財政学会が福島大で開催された。「平成大合併の検証」というシンポジウムで、『地域自治の最前線』を執筆された福島大学の牧田実さんが報告した。報告を聞いて、珍しく会場から「書評」に書いたことなどを質問した。

山崎さんから、わたしの拙ない「注文」などへの彼らしいコメントが聞きたかった。だが、残念ながら、もうそれは叶わない。「研究パートナー」らに聞いてみよう。それと山崎さんが精力的に進めてきた上越市の調査研究が、持続的に推進されることを願ってやまない。

それにしても、山崎さんの若すぎる「死」は残念でならない。社会学専攻のわたしの元同僚も重い病に倒れて、もういない。3年ほど経っても、寂しさがつのる。

山崎さんのような存在感がある、若く有能な研究者を偲びつつ、ささやかな「思い出」とじたい。

(名古屋市立大学名誉教授)

山田 公平 論争相手を失った残念さ

私と山崎先生との交際は、コミュニティ政策学会の研究会で初めて知り合って以来の「研究会仲間」としての経験に限られ、それも亡くなるまでの間の、さほど長くはない期間に過ぎなかった。だが今振り返ってみると、その間にうけた人物印象は、大変ユニークで大きなものがあった。それらは一言で言えば、山崎先生は私のコミュニティ研究にとっての議論の「好敵手」であったというのが、率直な感想である。

そのような経験のなかで忘れられないのは、私たちの『日本コミュニティ政策の検証』の原稿執筆の間に、彼と交わした議論のことである。私はこの本のなかで、第8章「福祉国家・地方自治・コミュニティ コミュニティ政策を検証する構造的・国際比較的視点」を担当したが、彼は編集者の立場で私の書いた原稿を大幅に修正することを試みた。そこで私は早速いくつかの論点で反論するメールを送ったところ、彼から先生の家を訪問してさらに議論したいという連絡があり、私はいささか戸惑ったが、承知した旨を返事したところ、彼はわざわざ岐阜から名古屋の南端の天白区の私宅まで出かけてきてくれたのである。議論の中心は、私の日本地方自治における行政村と自然村の二重構造論の内容についてであったが、お互いの議論は、この問題を超えて随分闊達な展開となり、私にとって益するところが多大であった。その中で、彼が構想しているドイツのゲマインデ自治体論についても聞くことができた。

彼の訃報を聞いた時、真っ先に思い出したのが、この時の彼の議論に熱中した姿であった。と同時に、私は、かけがえのない「論争相手」を失った残念な気持ちに沈みこんでしまったのである。彼を失った今は、この時の議論を私なりにさらに展開することが、彼に対する私のせめてもの恩返しになるのではないかと考えている。山崎先生、ありがとうございました。

(名古屋大学名誉教授)

山本 素世

山崎先生と初めてお会いしたのは、私がまだ院生であった1996年のドイツ、コンスタンツでの日独社会科学会であったと思います。私の恩師の神谷先生の論文のことで、山崎先生からお声をかけていただいたことを思い出します。山崎先生は、当時ドイツの共同体のことを研究されているとのことでした。その後、学会などでお目にかかるたびに少し言葉を交わさせていただいたり、先生の論文の抜き刷りをいただいたり、私の書いたものをお渡ししたりしておりました。私自身の研究では、先生の論文や著書を参考文献とさせていただいたこともありました。

それからコミュニティ政策学会でご一緒する機会を得て、地域自治体の研究会にも快く参加させていただきました。研究会では、先生のリーダーシップや論点、問題意識などを多くを学ばせていただくことができました。中でも、大仙市と花巻市への調査に同行させていただいた際には、フィールドワークの進め方やまとめ方だけでなくこれまで知らなかった先生の意外な一面にも遭遇し、深く印象に残っております。先生から学んだことをこれからの自分の研究に活かしていきたいと思っております。

コミュニティ政策学会では、編集委員長を務められ、さらなる学会の発展や多くの人が論文を発表できる場として熱心に取り組まれていらっしゃいました。また、研究会においても、これからさらに調査を進め内容を深めていこうという時だったと思うと、本当に惜別の念でいっぱいです。

山崎先生のご冥福をお祈りいたします。

((公社) 奈良まちづくりセンター)

林 明鮮 山崎さんとの出会いと思い出

山崎さんの訃報を知らされた時には、どうしても信じられませんでした。いや、信じたくありませんでした。病に伏したことは山崎さんご本人から直接すぐメールで知らせてくれましたので最初から分かっていたし、治療の件もお話を頂いて頭では分っていましたが、世界においても最先端にある日本の医療技術を堅く信じ、必ず治ると信じてやまなかったからです。社会学研究者として、今までこつこつと研究してきた成果が、これから花開く矢先に、あまりにも早く辛いお別れが訪れるとは、夢にも思いませんでした。私にとって、かけがえの無い親友を亡くした悔しさや悲しみは、言葉では言い表しようがありません。心よりご冥福をお祈り致します。

山崎さんとの出会いは、私が貝沼先生の研究生として、名古屋大学社会学科に入った1993年の春のことでした。

もう20年以上のお付き合いになりますが、仲良くなったきっかけは、当時、学部から留学生への学業面における世話役のチューターを募集しておりましたが、それに手を挙げてくれたのが山崎さんであり、それが私との出会いです。

私は、中国のその当時の特殊な社会背景により、英語も社会学もほとんど習得できなかった年齢段階にある人間ですので、学問については、胸にふつふつと血がたぎるだけで、中身は空っぽ同然。しかし、大学院に入るためには、英語の試験は不可欠。その事情を知った彼は、「一からやるしかない」と言ってくれ、週に一度、一緒に英語版のギデンズの社会学の本をきっちり読むことになりました。普段は優しく、周りにとても配慮のある彼ですが、学問に対する要求は一切妥協を許さず厳しいものだったので、それに対して私自身も応えようと、よく徹夜をしながら勉強したものでした。そもそもは一時間の予定が毎回時間をオーバーしたので、内心いつも有り難くそして申し訳ない気持ちでいっぱいでした。そのお礼にと、時々、些細ではありますが、家内の手料理をふるまったり、代わりに中国語を教えたりしたのですが、当時8歳だった娘がすっかり山崎さんのファンになってしまい、未だに山崎さんのことが好きだとよく話しています。娘は今日本にいますが、先日、娘が一時帰国した時に「山崎さんが亡くなったのに、お父さんお葬式にも出られなくて、一生悔いが残ると思うよ」と言ったら、「私に言ってくれたら、お香典とか持ってお父さんの代わりに駆けつけたのに」と目に涙を溜めて言ってくれました。あの時の山崎さんの助けがなかったら、私は恐らく大学院にも入れなかったでしょうし、今日の私もなかったと思います。

一つのエピソードとして、私が修士試験を受ける前に、貝沼先生が突然（先生方の間では既知の情報だったかもしれませんが）情報文化学部に移動することになりました。私は、

目の前が真っ暗になり、まるで“みなしご”になったような気分で、日々落ち込んでいました。その時、山崎さんにはよく私の悩みや愚痴を聴いてもらったり、励まされたりしました。おかしく思われるかも知れませんが、山崎さんは、年齢は私よりずっと下ですが、色んな意味で兄貴のよう頼り甲斐のある存在でした。

その後も親交を深めていき、その中で、私が山崎さんを一番敬服したところは、人柄は勿論のこと、やはり研究或いは学問に対する姿勢だと思います。彼は若い時から、お酒を飲んだ後だろうと、どんなに忙しい時だろうと、必ずスケジュール通りにその日その日の勉強はきっちりやり遂げるタイプでした。彼は当時ドイツ語の勉強にも励んでいましたが、その勉強を怠るのを見たことは一日たりともなかったような気がします。

ある寒い夜、学校で二人で12時すぎまで勉強してから、私がいつも通り、夜中の人の気配の少ない静かな覚王山通りを自転車で家路を急いでいると、突然警察の職務質問に引っかかり、あれこれと散々質問されました。夜であってもあの警察の疑いに満ちた鋭い目つきが、未だに脳裏に焼き付いて離れません。思い返して見れば、当時小学生の娘用に買ったばかりで、ピカピカの黄色の可愛らしい自転車に、むさ苦しい疲れた顔をした大の男が乗っていたのですから、盗んだ物だと疑われても無理もないだろうと思いますが、当時は腹が立って文句を言ったような気がします。翌日、山崎さんにその話をしたら、大笑いしていたのを覚えています。こんなエピソードもありました。

岐阜大学に就職後のある真夏、山崎さんに長良川花火大会に誘われ、長良川沿いに建っている彼の家の窓越しに綺麗な花火の打ち上げを観賞しました。その後、二人で酒を飲みながら、これからの研究のことや進路のことなどをゆっくり話したり、たわい無い話をしたりして楽しい一晩を過ごしました。

私が2003年に博士号の学位を取り、2004年に中国に帰国した後も交流はずっと続き、セミナーに呼んだり、調査拠点に案内したりしました。最初に招待したのが2005年山東大学のセミナーですが、会議が終わると「待ってました」と言わんばかりに、山好きの彼を泰山や孔子の故郷曲阜などに案内しました。セミナーに来てくれたのは三回で、その他一回は声をかけましたが、都合の調整が上手くいかず、結局来れませんでした。彼の忙しさに気兼ねし、呼ぶのを控えるようにしたのです。最後に彼が来てくれたのが、2013年の秋に私が主催した中日韓のセミナーでしたが、私が知っている彼はずっとジョギングをしていたが、その時彼はスイミングをやっているとのことで、至って元気でした。セミナーが終わって、カラオケに行った時に、楽しそうに歌っている姿が今でも目に浮かびます。酒にも強く、山にも強く、ジョギングにスイミングなど様々なスポーツにも長けていた彼が病に犯されるだなんて未だに信じられずにいます。「なぜ山崎さんが・・・」、という思いと彼とのたくさんの思い出が走馬灯のように脳裏を駆け巡るのです。

そして私が渡日した際には、よく名古屋駅の近くで一緒に酒を飲み、話が尽きませんでした。ある夏にはレンタカーを借りていくつかの限界集落を案内してくれました。その時のことが、今も時々目に浮かんできます。大変印象に残ったのは、その村にはたった一人の80過ぎの高齢者の女性が残っていましたが、都会に住んでいる息子さんが一緒に暮らそうと言っても「村を離れたくない」と断り、バスがそのおばあさん一人のために週に一回来ると聞きました。日本行政の国民に対する思いやりに深く感動を覚えたものです。もうひとつの村には三人が暮らしていましたが、夜には野生動物が山から下りてきて野菜

を食べるので、小さな野菜畑に網をかけていました。ただ唐辛子だけは網をかけませんでした。「野生動物は、唐辛子は辛いから食べない」とそこのおばあちゃんが言いました。限界集落を回っているうちに、相続放棄された空家が多いことが分かりました。子供たちが親の家を放棄しているので、政府がお金を出して少しずつ取り壊すという話も聞きました。その時私が山崎さんに、「日本と中国の過疎村の比較研究をするのも価値が有るかも知れない」と言ったのを覚えています。

山崎さんとの思い出は多すぎて、何からどう話せばいいのか分からず、乱筆乱文になってしまいました。

山崎さん、ずっとお忙しい人生だったかと思います。今は天国で安らかにゆっくり休んでください。いつか私が同じところに行った時には、また昔のように二人で酒を交わし、昔話に花を咲かせましょう。その時まで私も研究熱心だった山崎さんに恥じないように一層自分の研究に励みたいと思います。

最後に、諸般の事情により、「山崎さんの偲ぶ会」に出席できないことを大変残念に思います。

ご冥福をお祈りいたします。

(中国 山東工商学院 東アジア社会発展研究院)



林先生と中国で孔子の墓参り

岐阜大学

伊原 亮司

研究分野が近いこともあり、山崎先生には生前、大変お世話になりました。

色々と思いがありますが、最も記憶に残っていることは和良の調査です。

わたしは、地域科学部への着任早々、科研の調査への参加を先生に勧められ、郡上市和良（旧和良村）という中山間地域における平成の大合併の影響にかんする調査にご一緒させていただきました。

とはいうものの、正直に申せば、あまり気が進みませんでした。なぜなら、わたしは一人で調査・分析するタイプの研究者であり、共同調査に馴染みがなかったからです。

しぶしぶという形で参加することになったのですが、調査を進めるうちに、山崎先生の共同調査を遂行する手腕に感心させられました。

調査設計から予算獲得、予算管理、調査票の作成、宿泊所や調査対象者へのアポイント、報告書の作成など、複雑な方程式を慎重に解くがごとく、着々と大がかりな調査を進めていくわけです。

と同時に、農村や地域社会にかんする「目の付け所」も学ばせていただきました。

大学が東京ということもあり、それまでのわたしは「地域」という視点が希薄でした。

和良の調査を経験してから、研究者として、そして個人的にも、地域社会に興味を抱くようになり、あちこちを見て回るようになりました。

今年の夏も、ゼミの学生を連れて、郡上踊りを見学しました。

そのついでに、和良の町に足を延ばしました。神社でたまたま地元のご年配の方が話しかけてくれたのですが、「若い人が少なくなり、祭りを存続するのも大変」と熱心に語りかけてくださいました。その話の中で、最近まで山崎先生および学生が手伝いに来ていたことを知ったのです。

昨今、国を挙げて「大学改革」が推し進められ、岐阜大学でも「地域貢献」が叫ばれています。

わたしは「地域貢献」とは何たるかを理解していませんが、山崎先生が思い描き、実行してきたことは、大学経営者たちががたり顔で語っているものとは全く異なるものであることを、その時に強く感じました。

地域科学部も「改革」を迫られており、近いうちに大きな変貌を遂げるかもしれません。しかし、どのような形に変わるにせよ、山崎先生たちが積み上げてきた地域にかんする学問的「蓄積」は、そして地域社会で築いてきた「財産」は大切にしなければならない、と強く思った次第です。

志半ばでさぞかし無念でしょう。あの世から、地域科学部および地域社会のこれからをお見守りください。

(労働社会学)

笠井 千勢

研究室がある建物も、講座も違う私が唯一山崎先生をお見掛けする機会、それは、山崎先生が私の研究室がある階にドイツ語のレッスンにいらした時でした。

フラクシュタイン先生のご指導を受けるため、A棟の7階に通っていらっしゃいました。お声が大きい先生でしたので、いつもお部屋から楽し気なドイツ語が聞こえてきました。何をお話されていたか分かりませんが、文章の合間に爆笑があり、とても楽しそうでした。

私は言語学を専門としておりますので、大人の外国語習得がいかに困難であるか存じております。強いモチベーションを持ち、継続して学習することが求められます。多くの人が外国語を習得したいという願望を持ちながら習得に至らないのは継続することが難しいからではないでしょうか。山崎先生は毎週欠かすことなく通っていらっしゃいました。足音も大きな先生でしたのでドアを開けずとも、廊下をのしり歩く様子がわかりました。

私の専門は、言語学の第二言語習得論です。母国語を習得した後に新しい言語を学ぶ際に起きる様々な現象について調査しています。ドイツのエアフルトでデータ収集を行った際、『以前、岐阜大学の山崎という人が来て調査をしていった』と現地の方に伺いました。エアフルトは旧東ドイツゆえ、西側のドイツ人のようには英語が通じません。私も四苦八苦しなから被験者を集めました。山崎先生がドイツ語を学ばれていた理由はこれだったのですね。異国の地で、豪快にドイツ語を話す山崎先生を想像して、くすっと笑ったのを感じています。日本で一緒に仕事をするチャンスはあまりありませんでしたが、同じドイツの街で仕事をした不思議と親近感を感じました。

あの、大きな笑い声を聞くことができないのが残念です。心よりご冥福をお祈り申し上げます。

(英語教育学)

黒田 学

山崎先生とは、地域科学部発足当初から4年間、ご一緒させてもらいました。彼と年齢が近い上に、地域社会を対象とする研究者同士ということもあって、学内の仕事以外にも、研究上でよく話す機会がありました。山崎先生たちと学生の調査実習に出かけたこともあり、彼の地域調査に対する真摯な姿勢は、学生共々、多くを学ばせて頂く貴重な機会でした。近年では、コミュニティ政策学会(三重県伊賀市、2015年7月)でお目にかかり、お話しする機会がありましたが、残念なことに彼とのやりとりはそれが最後になってしまいました。山崎先生が先立たれたことは、今でも信じられず、悲しい思いでいっぱいです。

ご冥福をお祈りいたします。

(立命館大学)

小西 豊 いつも忙しかった山崎さんへ

喪失感という言葉ではとても言い尽くせない、さまざまな思いが去来する。

初めて出会ったのは、1998年春、私が地域科学部に助手として着任して間もなくの頃であった。当時の私は趣味もなく、家庭もなく、どこも行くところがなかったので、毎日朝から夜まで大学で過ごしていた。週に何度か、資料室(談話室?)で先輩の先生方と飲食をともにするようになって、山崎さんとも話をするようになったように思う。

お互いに運転免許も持っていなかったので移動手段は自転車、そしてなによりも生年月日

が10日しか違わない同い年だったから、山崎さんに妙に親近感を覚えたような気がする。

手帳に細かな文字でびっしりスケジュールを書き込み、いつも忙しそうに学内を歩いていた山崎さん。私の品性に欠ける話題には沈黙、困った表情を浮かべていた山崎さん。料理が得意で、身の回りのことは何でもできた山崎さん。洒脱でありながらも、酔っばらうとなぜかよく名古屋弁になった千葉出身の山崎さん。酔っばらっての議論の最中、なんだか「おまえはタワケか」と言われたが、出身地の違いのため、私にはその侮蔑語はまったく効かなかった。

2000年から2001年にかけて、山崎さんはドイツで、私もロシアで在外研究、列車でウクライナ、ベラルーシ、ポーランドを廻って、ドイツにも寄ろうと思い、モスクワの郵便局の公衆電話から山崎さんに電話したこともあった。携帯電話もインターネットもロシアではまだ普及していなかった。

帰国してからグローバリズムとローカリズムに関する文献レビューをする研究会を開催しようということになった。研究会の名称はGL（グローバル）研究会とした。「チャランポランで、タワケのおまえには任せられない」ということで、山崎さんが研究会を仕切ることになった。古いパソコンを開けてみたら、山崎さん作成の研究会の記録が出てきた。

回	開催日	テキスト or 報告タイトル	報告者
1	2001年12月1日	S. サッセン『グローバリゼーションの時代』(前半)	山崎
2	2002年1月12日	S. サッセン『グローバリゼーションの時代』(後半)	山崎
3	2月9日	S. ストレンジ『国家の退場』	小西
4	3月18日	R. ロバートソン『グローバリゼーション』(前半)	白樫
5	4月13日	R. ロバートソン『グローバリゼーション』(後半)	白樫
6	5月11日	J. ヒルシュ『国民的競争国家』(前半)	富樫
7	6月8日	J. ヒルシュ『国民的競争国家』(後半)	富樫
8	7月13日	田口・鈴木『グローバリゼーションと国民国家』(前半)	竹森
9	9月7日	田口・鈴木『グローバリゼーションと国民国家』(後半)	竹森
10	10月12日	A. ギデンズ『暴走する世界』	山崎
11	11月16日	金子『反グローバリズム』	高橋
12	2003年1月25日	グローバリゼーション、人種とマスカルチャー	ラッセル
13	3月3日	感染症のグローバリゼーション／ローカリゼーション	粕谷
14	4月7日	R. パットナム『哲学する民主主義』	富樫
15	5月17日	ロシア：市場経済化の10年とグローバリゼーション	小西
16	6月21日	B. コーヘン『通貨の地理学』	合田
17	7月19日	F. アルト『エコロジーだけが経済を救う』	粕谷
18	8月22日	アジアの為替レート等について	佐々木
19	10月11日	産業空洞化か、グローバル化か？	富樫
20	11月8日	ドイツの市民団体について	山崎
21	12月13日	空間的分業と地域のアイデンティティ	富樫
22	2004年1月31日	バイオマスと農・山・漁村の再構築	粕谷
23	3月1日	農業の自然循環機能の再生と課題	小栗
		グローバリズムと協同組合、そして人々の生活と意識	有本
24	5月8日	グローバル企業の労働現場	伊原
25	6月9日	原告適格について	三谷
26	7月14日	映像産業のグローバル化	野原

2004年9月からはロベール・ボワイエなどを読んで、資本主義の多様性論に関する言説検討を始めようかと計画していたが、研究会は第26回で終了した。語るに落ちることになるので、私たちの研究会を継続していくモチベーションが一気に下がった理由は記さない。ただ、山崎さんはあれこれ言わず、「人間だれでも叩けば埃ぐらい出ますよ」、「闇夜に後ろから黙って撃ち殺すようなことしちゃダメだよ」と言ってくれた。私は山崎さんのその言葉に救われた。あの時はありがとう、山崎さん。

GL研究会を開催しなくなってから、山崎さんとの接点はほとんどなくなった。山崎さんが着実に学外に研究フィールドを築いていった様子は、この追悼文集で皆様が綴っておられるとおりである。学内ですれ違っても挨拶を交わす程度、せかせかといつも早足で忙しそうに歩き去って行った山崎さん。数年に一度、暇人の私に付き合ってもらい、酒を飲みながら議論していたら、相変わらず「おまえはタワケか」と言ってくれた山崎さん。ものすごく真面目で堅物に見えても、結構いろんな人間の生態を面白おかしく参与観察していた社会学者の山崎さん。

闘病生活のなかでも、強い意志を持って、よくぞ最後まで研究者としての仕事を続けられたと思う。ただただ感服するほかない。大好物の大量摂取と不摂生のせいで、たぶん私も10年もしたら肝臓か血管が爆発することになるろう。もしもそっちに行ったら再会できたら、「私がいへんだったときに、おまえは」と呆れて知らん顔などせずに「おまえはアホか」と真剣な眼差しで言ってくれないだろうか。安らかにお眠りください。合掌

(比較経済学)

白樫 久 山崎さんへ

突然の訃報に驚いています。昨年6月、君からの病気の知らせを聞いて、学問への意欲と山で鍛えた体力で必ず回復すると念じ、先日の子賀状で「何とか職場復帰に努めている」と書いてあったのでほっとしたばかりの後の知らせでした。

思えば君との岐阜大での7年間、新設の地域科学部、そして地域社会学研究室の創設の苦しみもありましたが私の最後の楽しい研究生活でした。岐阜に来る前には全く知らない二人でしたが基本的な研究方法が一致し、意欲的な学生諸君をゼミに迎え、岐阜市内、県北の郡上地域、そして北海道とゼミの学生を加えて、時には学部の学際領域の諸先生と共に調査を実施することができました。郡上の和良村の研究などは意義深く、そして楽しいフィールドでした。短い期間に著作を出し、報告書、学生の卒論にそれらの成果を残すことができました。山崎さん、こうした地域科学部での私の研究生活は若いあなたとの意欲的な共同研究が大きな支えとなり、豊かなものにさせていただきました。あなたはそれ以外にドイツの地域社会研究を独自の領域を一方で進めてきまして、この面での成果も大きく蓄積してきました。日本とドイツの地域社会調査をベースに普遍的な地域社会論を描くのが君の構想だったのでしょう。

山崎さん、君とは一緒に随分、山にはいりました。30代まで君は、正月は南アルプスの雪山で過ごすのが慣例で、岐阜大に来てからもしばらくは大晦日前後からいなくなっていましたね。北海道から来た私は日本アルプスはあこがれの山で、君と双六岳から三俣蓮華、白山、新潟県の雨飾山と歩き、近くの能郷白山や鈴鹿山脈なども良く入りました。若

い君に山でついて行くのは大変でしたが、大切な山の友人でした。こんな君ですから、まさかこんなに早く病魔が襲うとは考えられないのです。

沢山のやりのこしたことがあったでしょう。私が退職した後、社会学の鈴木栄太郎の岐阜高等農林時代の文書を見つけ出し、彼についての新しい研究を手掛けていました。栄太郎を追っかけて札幌にきて北大時代の栄太郎さんの助手だった北大の元教授（笹森さん）を尋ねたのが君との最後になってしまいました。一部、学会で発表したようですが、これなんかも研究半ばでしょう。一昨年は私も所属していた「日本村落研究学会」を岐阜で開催もして、君のこれからの活躍をみんな期待していたのに。登りたかったアルプスの山々、北海道の山にも入りたいと云っていたのに残念です。このまま別れてしまうのは、とっても寂しいです。またどっかで逢いましょう。

（名誉教授、農村社会学）

高木 和美

初めて山崎先生とお会いしたのは、岐阜大学に職場を移すための諸手続きや引越し作業に来たときでした。2002年3月末下旬、右も左も分からず、通勤や住居に関する条件が、当初打ち合わせ時に確認していたことと大きく食い違っており、何でも相談できる方がない中で、対応に苦慮していた時でした。

私がそんな状況にあったことは全くご存じなかった山崎先生は、地域科学部研究棟の7階、私が案内された研究室の隣の研究室におられました。たまたま廊下でお会いした時、「僕、今労働組合の書記長をしているんです。組合に入ってください」と、声を掛けて下さいました。「もちろん入ります」と返事をさせて頂きました。4月になると、「夏の調査、どうしますか？ 白樫先生の研究室で一緒に話し合いませんか」と言われ、私は地域学実習（主として前学期の授業）であることを知らず、大掛かりな住民の生活問題の階層性と共通性をつかむ調査を提案したところ、山崎先生は白樫先生と共に、それを実現して下さいました。以降、地域学実習を通じた共同作業は亡くなられるまで続けました。

私にとっては最初の地域学実習の後、共同研究に誘っていただきました。山崎先生は、私の論文をたくさん読んで下さいましたし、私も山崎先生の論文をいくつも読ませていただきました。研究領域や理論的立ち位置は違いましたが、お互いに学びあえるものがあったと思います。お互いの論文をしっかりと読みあっているという、そしてお互いに大事にしているところを知っているという関係だったと思います。

山崎先生の母上が倒れられた際、「場合によっては休職しなければならないかもしれないが、入院中仕事をつづけながら『通い介護』をどのようにしていけるか」と問いかけられたり、母上が亡くなられたあと、「亡くなったんだ」と言われて、しばし無言の時を共に過ごしました。山崎先生は、私が長年働きつつ母を介護し看取ったことを知っておられたので、無言でよかったのでしょう。私は、2015年に癌で夫を亡くしたので、闘病する人とその傍にいる者の気持ちが、それなりにわかります。山崎先生の闘病中、職務上の打ち合わせや病状を聴くわずかな時間に、病院の食堂のテーブルに向かい合うとき、私からお見舞いを言う必要がありませんでした。

日々7階の研究室に向かうとき、山崎先生がおられないことに埋めがたい虚しさを覚え

ます。それほどプライベートで交流することはなかったのですが、率直に「地」で話ができる、ほかにはない同僚でした。

(社会福祉学)

富樫 幸一 山崎さん弔文

一昨年の秋、癌に罹られ、手術や治療につとめられてましたが、それでも少しでも良くなると、またすぐに大学に出て来られて、学生の指導をされたがっていました。12月の半ばにも学生とのゼミに顔を出していると聞いて、ちょっと様子をのぞいたのが最後になってしまいました。

山崎さんには、元の教養部時代に最後の頃、名大の助手だった当時に、非常勤で来ていただいていたのが岐阜大学との最初のご縁でした。20年前に地域科学部ができて、立ち上げの時から関わられて、その時は「さあ、これからだ」というところだったでしょうし、今も「まだまだ、これから」という時に、終わられてしまったことに、とにかく無念だったのではないのでしょうか。

地域科学部ができてすぐ2000年頃から、3年でやる地域学実習の調査を、それから数えると16年、一緒にやってきました。せっかく、同じ学部にはいろいろな分野の人が集まっているんだから、実習も一緒にしようと、ここからすぐ近くの徹明地区でやったのがスタートでして、その後、どんどん手を広げて行きました。2001年につくった「ぎふまちづくりセンター」での景観のサロンも、蒲君たちと13年ほど、毎月、続けていました。

今はだいぶ知られるようになった、古い町家が残っている川原町のまちづくりでも、実習で聞き取り調査をしながら「まちづくり協定」をつくるのを手伝って、電柱をなくする委員会をまとめて、いろんな考えがあるなかで、みんなが一つになるには川祭りの神輿を復活させようじゃないかと山崎さんがいいだして、ほんとはうちの学部は女子学生が多いんでどうかと内心、思ってたんですが、地元の皆さんと一緒にやってしまったんですね。こんな感じで、山崎さんが関わられたことや、きっかけをつくられたことが、町や地域の中に形としても、記憶としても遺されています。

学生の実習では、高齢化がすすむ郊外団地の大洞や三田洞の調査もしてましたし、「たまり場」づくりのための落語会もありました。まちづくりや地域との関係でもそうですが、調査や課題が持ち込まれると、「じゃあ、それはこうしましょう」とか言って、どんどん先に行ってしまおうとするので、ついていくのが大変なもの、また山崎さんらしいところだったですね。

岐阜市の総合計画のアンケートやワークショップも請け負い、こちらでも夜の仕事のあと、何度、飲んでたか分かりません。この手のはなしは、しだすともうきりがありませんが、後ろの遺影の写真は、右手にビールのジョッキを持ってますね、トリミングしようかといいかかったんですが、このままの方が彼にはいいということで。かざる写真を探してもらったら、ビール、ワイン、ビール、そんなのばかりで。祭壇にも、ビールとワイン、それも甘いものも両刀遣い。写真も入れた用紙に、みなさんにメッセージを書いていたみたいパネルも、いつもやっているワークショップ・スタイルでして、ほんとに彼がいなくなった気がしません。

学会でのお仕事や共同研究などもたくさんされていたようですし、あの山崎さんにして

も流石に忙しすぎるんじゃないの、と脇からみていたところで、ご病気になられてしまったわけです。授業でも大学の仕事でも、代わりはあるからといったのに、自分でどうしてもやりたがる、がんこですね。

岐阜大学では「君が代」の代わりに、愛唱歌として「我等多望の春にして」という、さきほどの鈴木栄太郎先生が岐阜高等農林時代に作詞された歌が流されます。「たくさんの望み」をもたれながら、それなのに、これからまだまだのお仕事だったはずなのに、大穴を開けて去ってしまったので、どうすればいいのでしょうか。

山崎さんが地域に遺していったくれたものと、もう一つは育ててくれた学生さんや卒業生達です。お通夜でも、急な連絡にもかかわらず、たくさん集まってくれました。次の世代の人たちが、山崎さんがかたちにしてくれたもの、育ててくれたものをもとにして、やりのこされたことをひきついでいくことが、彼への手向けになるのかと思います。

(地理学)

土岐 邦彦

地域科学部の第一期生と一緒に本学部に赴任してきたのは、年齢順で言えば白樫久先生、竹内伝史先生、そして私と山崎さん、三井栄さんの5名でした。貫禄あふれる白樫先生と竹内先生はともかく、若いエネルギーを弾けさせていた山崎さんと三井さんの姿は、地域科学部のスタートにふさわしく、中堅の私にはとてもまぶしく映っていたことを思い出します。順当に定年を迎えたお二人を送り出し、私もあと2年で退職を迎えようとしているにもかかわらず、順番を守らず先に行ってしまった山崎さん。さぞかし無念だったことでしょう。

同じ講座に所属した縁もあり、私の住む山県市に調査に入りたいという山崎さんに住戸地図をお貸ししたり、「この人を訪ねたらいいよ」と少しばかりの助言をしたことを懐かしく思い出しています。あなたの研究と教育への強い思いを私も残された教員生活で引き継いでいけたらとあらためて思っています。ごくろうさまでした。そしてありがとうございました。

(発達心理学)

西村 貢

フランスの政治家：ジャン・モネは、欧州統合を念頭に「何事も個人なしには始まらない。しかし組織なしには継続しない」と語った。協働社会における地域コミュニティのあり様をともに探求する研究者の同僚として、地域コミュニティに対する強い想いとリーダーシップの存在は重要だが、その意思を受け継ぐしっかりした組織も大事だとの共感が山崎先生との関係であった。山崎先生から、住民に寄り添うことの大切さを地域調査に同行しながら教示していただいた。そして、作り上げた組織を運営する手法や担い手養成の大切さも学ばせていただいた。これからの社会は、地域自治の個性的なあり様が問われる時代だけに、住民の輪の中に分け入る真摯さ溢れる人柄と研究成果に大いなる期待を寄せただけに逝去されたことを悔しく思う。冥福を祈る。

(財政学)

林 琢也

山崎先生との出会いは、私が岐阜大学に赴任した 2010 年からになります。山崎先生も私も農山村を研究対象とし、現地に入り込んで関係者と付き合うなかで、徹底的に調査を行うスタイルの研究者だったので、それ以来、何かとお世話になりました。

一緒に行ってきた仕事の中で、最も長い時間を過ごしたのは、郡上市和良町での地域づくり活動だと思います。先生から誘いを受け、2011 年から携わっているので、もう 7 年になります。和良町の各集落でのワークショップや住民有志との集まりなどを通して、フィールドワーカーとしての地域との関わり方について深く考えるきっかけを頂きました。

まだまだ多くのことをご教示いただきましたのですが、本当に残念でなりません。先生、早すぎますよ…。今でもビールを飲みながら、嬉しそうに語る先生の姿が目に焼き付いて離れません。先生と過ごし、ともに語り合った時間を財産に、農村振興や地域づくりに関する研究を深化させていくことが、残された我々の務めだと思っております。本当に有難うございました。先生のご冥福をお祈りいたします。

(経済地理学)

林 正子 山崎 仁朗さんへの手紙

前文ごめんください。

1 月 11 日のご葬儀から、早くも 8 ヶ月の月日が過ぎようとしています。これまでの一日一日、折に触れて、山崎さんのご冥福をお祈りしてきました。もっともっとご研究をお続けになられたかったにちがいない山崎さんのご無念にも、想いを馳せてきました。

山崎さんと初めて親しくお言葉を交わしたのは、20 年前、地域科学部草創期の忘年会の席でしたね。私が「森鷗外におけるドイツ思想文化受容の意義」についての研究に携わるために、大学院生時代、ミュンヘン大学に留学したことや、岐阜大学教養部に就職後、ハイデルベルク大学日本学研究室で女性文学や現代小説に関する授業を担当したことをお話ししましたら、山崎さんからは、ユルゲン・ハーバーマスやマックス・ヴェーバーをはじめ、名古屋大学時代にご研究を深められたドイツの思想家の名前が次々と挙げられ、「ドイツ鼯鼠」のお話で盛り上がったことを記憶しています。

しかしながら、その後の数年間は、地域科学部の理念やカリキュラム編成をめぐって、随分と議論・・・激論も闘わせ、緊張の走った剣呑な雰囲気の中、白樫 久先生が仲裁に入ってくださいましたこともありましたね。創設されてまもなくの地域科学部という新しい学部を、それぞれの専門分野や研究手法を活かして盛り上げてゆきたい、という同じく熱い思いがあったらこそその「衝突」であったと、今、改めて痛感しています。

この度、「山崎さんを偲ぶ会」の開催に先立ち、世話人の小西 豊さんより、ドイツにおける山崎さんの追悼記事を翻訳するようご依頼を受けました。拙い訳文で恐縮至極ですが、心を込めて翻訳しました。ドイツのご友人たちが、山崎さんの「ドイツ地方公共団体における自治やコミュニティ施策」に関するご研究をどんなに高く評価していらっしゃったか、また、山崎さんとの親交をどんなに大切にいらっしゃったか、そして、どんなに深く山崎さんのご逝去を悼んでいらっしゃるか・・・翻訳の任務に当らせていただいたことに、心より感謝しています。

岐阜大学地域科学部の歴史と重なる歳月、山崎さんが地域社会学者として、岐阜の地にも密着し縦横無尽に繰り広げてこられた諸活動とご研究の成果の数々を、地元の大勢の方々がご存知で、異口同音に高評価と感謝の念を寄せていらっしゃいます。そして、山崎さんのご訃報に接し、深い哀悼の意を表していらっしゃいます。

山崎さんは、長年にわたって、ドイツでも、岐阜でも、精力的な「地域研究」を通して、本当に多くの方々とのかけがえのないネットワークを築いてこられたのですね・・・改めて、山崎さんの熱意と実行力、ご功績の数々に心よりの敬意を表します。

山崎さん、一心不乱、日々邁進してこられたこれまでの一日一日、どうぞ今は、安らかにお休みください。ご冥福を、いつの日も、心よりお祈りしています。

かしこ
2017年 長月
(日本近代文学)

人見 佐知子

山崎先生とは、お誘いいただいて何度か郡上にご一緒しました。地域に入り込んで研究をする、社会学者の大胆さと繊細さに感服したことをいまでも印象深く思い出します。ここよりご冥福をお祈り申し上げます。

(日本近代史)

フォン・フラクシュタイン, アレクサンドラ 山崎仁朗さんの思い出

山崎さんと私は、まったく異なる研究分野に携わっていましたが、職業的にはそれほど多くの繋がりを持つことはありませんでした。むしろ、プライベートでの共通点が数多くありました。

当初は、山崎さんと私と夫の3人で、後年には、山崎さんのご伴侶である松下さんも一緒に4人で、料理をしたり旅行をしたり、本当にいろいろなことを楽しみました。

山崎さんは、私たちのドイツでの結婚式にも列席してくださいました。私が松下さんのご両親のもとでバーベキューをしたり、山崎さんが私の夫の両親のもとでお酒の席での歌を歌ってくれたりもしました。

私に納豆を賞味することを教えてくれたのも山崎さんでした。また、シュヴァルツヴァルトでは10kgを超えるラズベリーを摘んで、12壘分のゼリーもつくりました。

大学が法人化する際には、何人かの同僚の方々と一緒に、山崎さんは外国人教師である私たちを精力的に支援してください、私のポストが正規雇用化された当初には、管理業務の数々を助けてくださいました。

岐阜を訪ねてくれたドイツ人の友人のひとは、山崎さんと私が管理業務に関するメールを、「消去、消去、消去、消去・・・」と読み上げていたことが、思い出として残っているそうです。この友人は、後に、冗談めかして、山崎さんのことを「消去先生」と呼んでいました。

また、山崎さんは、私たちが現在住んでいる古民家を見つけた際にも、何かと支援して

くださいました。私たちの人生の至るところ、山崎さんの「痕跡」が残っています。彼が亡くなって、私たちは寂しくてなりません。

(ドイツ語)

牧 秀樹

私の専門が言語学で、山崎さんのご専門が社会学ということで、なかなか接点がなかったのですが、それでも、一つ、接点がありました。私は、岐阜市鷺山に住んでおり、大学までは、車で通勤しています。それに対して、山崎さんは、いつも、道三通りを、スポーツサイクルにまたがって、颯爽と通勤していました。

ある時は、昼間に、また、ある時は、夕方に、道三通りで、私達はすれ違いました。私は、山崎さんのことを絶対見逃しませんでした。山崎さんは、13年落ちの私の中古車を、普通に見落としていました。ですから、キャンパスで会って、「山崎さん、昨日は、夕方、道三通り、走ってましたね。」と言うと、ほとんどの場合、「みんながそう言うんですよ。」と言って、私を認識したことは、絶対、一度もなかったと思います。道三通りで、一度も私を見たことがなくても、私が見ていたことで、キャンパスで出くわすと、これで会話が始められるので、私としては、とてもいい、すれ違いの経験でした。

2017年1月8日より、また、私達は、すれ違うことになりました。それでも、道三通りを通る度、山崎さんは、颯爽と走ってますよ。私の脳裏の中で。そして、鷺山の風景の中で。

山崎さんが、ずっと颯爽と走っている姿、これからも楽しみにしています。お互いに、安全運転で行きましょうね。

(言語学)

三谷 晋 山崎先生の冥福を祈る

山崎先生が癌に倒れたときは驚きました。私の研究室は山崎先生がゼミをする部屋の隣にあり、山崎先生は私の部屋側にあるホワイトボードに筆圧の高いタッチで板書をし、大きな声で、大きな笑い声で講義をされるのが日常で、そのこともあり私は部屋のレイアウトを変えたほどです(笑)。そういうタフな人が癌になるというのが信じられなかった。また、少し前に和良に他の先生方と一緒に訪問することがあり、そのときも元気そのものだったからです。でも、そのタフさに一縷の望みをかけ、復活すると願っていました。亡くなる二ヶ月ほど前に柳ヶ瀬で一緒にいたときに、片目を摘出し隻眼になっているのが痛々しかった以上に、隻眼のまま自転車や車を運転する、毎日たくさん歩いてリハビリをする、という話をうかがい、この人なら復活もありかもしれぬなと思いましたが、かなわぬ願いでした。

山崎先生は地域自治を念頭に地域住民による地域の支えを研究されており、先駆的な上越市についての知見も有しており、コミュニティ政策にも精通されていました。それは名もなき人びとや地域へよせる優しさが根底にあったのではないかと思います。山崎先生は、地域をフィールドにする社会学者ですが、旧和良村への関与は、旧和良村の方々との人間

的結びつきがもとにあって、彼らを応援したいという彼の人柄に由来するものだったのではないかと思います。癌で意識を失う直前までゼミの指導をされるなど、学生への教育も彼の人間性が根底にあるのだろうとも思います。

組織としても、旧和良村の方々としても、私を含む彼を取り巻く様々な人間にとっても、彼の死は大きな損失です。彼もやり残したことがたくさんあって、無念だったと思います。しかし、個人としては、隣の部屋からの大きな板書の音や大きな声、笑い声が聞こえないことがとても悲しい。

(行政法)

山口 利哉

地域科学部でお仕事させていただいたときは、事務職員でありながら GL 研究会にも参加させていただき、学生時代に「社会学」を学んだものとしていろいろ示唆いただいたことが多かったです。

一度、美濃祭りにもドイツの研究者とともに 参加いただき、一緒に神輿をつったこともいい思い出です。

(事務職員)

ラッセル、ジョン・ゴードン

山崎先生とはあまり話しする機会がありませんでしたが、もうお会いすることがないのかと思うと悲しい気持ちになります。先生は残された数々のご功績に敬意を表しますとともに心より冥福をお祈りいたします。

(文化人類学)

和佐田 裕昭 山崎先生へ

地域科学部が設置された後、はじめの内は時間割やカリキュラムに関する色々と面倒な実務作業が多くありました。そのころは、所属講座や専門分野の違いを超えて、作業をすることが現在より頻繁にあったと思います。山崎先生の学部発展のため献身のすごさを認識したのはそのようなときでした。ある晩 — まだ深夜まではなっていませんでしたが — 学務係で、先生が授業に関することで何人もの授業担当の方々に電話されていたのを見て驚きました。当時、山崎先生は 30 歳そこそこの最も若い教員のひとりでしたので、こんな若い方が、遅い時間に学部全体の授業に関する細かい作業をてきぱきと進められることに驚嘆するとともに、先生の学部への献身の実態を見たのでした。

山崎先生と私は所属講座が地域構造講座と地域環境講座で異なり、研究分野も社会学と量子化学と異なっておりますので、学部創設時以降は学部内委員会等で時々ご一緒する程度となりました。しかし、例えば、共にカリキュラム委員会に所属した際に激しい議論を行ったこと、いつも詳細に記録を取られ、注意が発散しないように議論をリードされていたこと、オープンキャンパスでの山崎先生のミニ講義を聞いた高校生が感激して地域科学

部に入学してきたことなどが強い印象に残っています。

20年経過した地域科学部で、今後の地域研究と文科系分野の教育を一層発展させて下さるだけでなく、若い日以来の熱意で研究・教育以外にも地域科学部に多大の貢献を頂けると思っておりました。山崎先生が突然ご逝去された衝撃はあまりにも大きく言葉が見つかりません。

山崎先生が達成された様々のご貢献は、地域科学部だけでなく今後の岐阜大学で永く記憶され続けるものです。これを引き継ぎ、発展させられるよう努力を重ねてゆきたいと思っております。ほんとうにありがとうございました。ご冥福をお祈り申し上げます。

(量子化学)

卒業生・学生・大学院生

浅野 有香

私が4年生の11月頃、御病氣や入院されることを伺いました。ご自身が大変な時にも関わらず、私たちのことをずっと気にかけてくださいました。卒業後、先生に久しぶりにお会いできた時、お話や食事をする姿はお元気そうに見えたので、突然の訃報にとっても驚きました。

ゼミでは社会学にかんする知識だけでなく、実際にフィールドワークをしたり、調査をまとめて発表したり、いろんなことを教わりました。郡上や新潟でのフィールドワークでは、生の声を聞いたりその土地を感じたりすることで、その場所の良さや大変さをより学ぶことができました。また、フィールドワークで先生とゆっくりお話しをするのも楽しみでした。先生は社会学のことや卒業論文のこと、就職活動のこと、それ以外でも困っていること、親身になって話を聞いてくださりました。もうお話しできないのが残念でなりません。

先生には大変お世話になりました。山崎ゼミに、山崎先生に出会えてよかったです。本当にありがとうございました。

心よりご冥福をお祈り申し上げます

(2015年度 山崎ゼミ卒業生)

大野 綾子

山崎先生がご逝去され、半年以上経ちましたが、お正月には年賀状のご返信を頂いており、回復に向かっているとお言葉もございましたため、未だに信じられない思いでいっぱいです。先生のゼミでは色々な場所へ行き、様々な方と出会うことができました。先生は私達ゼミ生をはじめ、誰にでも親切であり、親身になって話を聞いてどうしていくべきか一緒になって考えてくださりました。ゼミで様々な方と会う中で、先生は多くの方に信頼され、頼られていると感じました。先生のゼミに所属し、地域のコミュニティや調査方法等、勉学以外にも、初対面の人と打ち解ける方法や人との距離のつめかた等を学ぶことができました。先生のゼミで学んだことは、現在の私の仕事にも活かされており、感謝してもしきれません。在りし日のお姿を偲び、心からご冥福をお祈り申し上げます。

(平成27年3月卒業)

小島 友花

山崎先生には卒業以来お会いすることができず、ご逝去を知った時は本当に突然のことです。たいへん驚くとともに深い悲しみで一杯になりました。

山崎先生には、学生時代のゼミにおいてご指導賜りました。ゼミでは書籍や文書からだけでなく、実際にひとから話を聴くという聴き取り調査を中心に行いました。地域の方と何度も話し合い、聴き取りを行うことで、課題や魅力などの地域の特徴が具体的に、どのような対策をとるべきか明確にしていくことができました。

ゼミの活動を通して、何事に対しても諦めずに向き合い続けることの大切さを学びまし

た。山崎先生から学んだ真摯に向き合う姿勢を、今後の自分に生かし続けていくことがご恩に報いると思って頑張っていく覚悟です。

山崎先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

(山崎ゼミ卒業生)

坂井 美由紀

私は平成28年4月に大学院に入学し、山崎先生のゼミに所属しました。先生はすでに闘病されておりましたが、復帰された期間にご指導いただくことができました。

漠然とした研究テーマしか描けていなかったにも関わらず、私を院生として受け入れてくださったことが、岐阜での様々な出会いや経験につながっていると感じています。山崎先生との出会い、ご指導に感謝し、これから研究を進めていきたいと思っております。

心よりご冥福をお祈りいたします。

(地域科学研究科)

佐藤 則子

早いもので、先生が亡くなられてから半年以上が過ぎました。院試前の面談で初めてお会いしたのが2014年11月、それから3年近くがたとうとしています。先生に直接指導をしていただいた時間は実質1年ほど。それなのにもう10年も教えていただいているような気がするの、先生を介して出会ったたくさんの方々、さまざまな土地と、引き続き交流が続いているからだと思います。TAとして参加した野々倉や関ヶ原の実習、ゼミで取り組んだ上越市旧牧村の調査、知恵熱が出そうな飯田市調査、焼きそばを死ぬほど焼いた三田洞団地の夏祭り、和良のホテルと日本一の自慢の鮎、先生が病をおして実行委員長を務められる姿をスタッフとして目の当たりにした村研の和良大会などなど、どれも密度の濃い経験でした。現地にいるときの先生は、研究室にいるときよりもいい笑顔を見せていたのではないのでしょうか。今、写真を漁っていてもほんとうにそう感じます。

ゼミでは厳しいコメントをされることも多く、いつまでもグズグズしている我々学生の熱量の低さを不甲斐なく思われていたことでしょう。それでもじっと辛抱してこちらの言葉を理解しようとしてくださる姿勢、要点をついたアドバイスには、頭の下がる思いでした。また、花火大会見物や飲み会を企画されているときのちょっと照れたような様子には、ギャップ萌えという言葉も頭をよぎりました。休職をされている間の山崎ゼミは自主ゼミを続けていたのですが、体調が許す限り(たぶん許していなくても)最優先でゼミに顔を出してくださったことは、学生の心の支え…ちゃんとやらなきゃという気構え…になっていたと思います。頭痛がひどく声を出すのもやっとという状態でゼミにいらっしゃる先生の責任感・使命感と行動力に、私たちは動かされてきました。

2度目の手術がかなりの大手術だったと聞き、まだ入院されていると思っていた先生から突然「皆さんへ 山崎です。お世話になっております。明日(16)の14:45から、ゼミを出席します；必ず出席してください。よろしく願いいたします。」というメールが入ったのが、2016年12月15日。当日、「先生は大丈夫なのか」と騒然となるゼミ生を

傍目に、心配そうな松下さんの手を振り払うように大学にいらした先生は、ゼミメンバーの顔と作業の進捗を確認し、忘年会の日程までしっかり決めて、目的を果たして帰って行かれました。そして年末 20 日に先生オススメの cafe ZU-ZU で忘年会を開催したときも、終始ニコニコと我々の様子を見守っていらっしゃいました。まさかそれが最後になるとは。あのとき「今、行かなければ」と先生を奮い立たせる何かがあったのでしょうか。

先生が休職をされている間、先生ならどんな意見を言われるだろう、どんな風に仕切られるだろうと思うことが度々ありました。そのときはお元気になったらまとめて質問しようと思っていました。先生もずっと復帰を前提に闘病されてきたと思いますし、その思いが人一番強いこともみんなが感じていました。何故あのときもっと踏み込んで質問しなかったのか、あのこともこのことも、どうして遠慮せず聞いておかなかったのか、考え始めると後悔しかありません。でもおそらく一番悔しい思いをしているのは山崎先生で、途中で残された膨大な仕事からもそれを推察します。それらがどんな形で結実するはずだったのか、先生は永遠に持って行ってしまいました。

とはいえ後悔するばかりでは先に進まないで、ひとまずは修論がんばります。先生に読んでもらうつもりで、自分の疑問に自分なりの回答が出せればな、と思っています。

(地域科学研究科、もと山崎ゼミ)

竹中 悠人

山崎先生がお亡くなりになられたことを知り、驚いたとともにまさかという思いでした。山崎先生には聞き取り調査の手法や、本で学んだ事を実際にフィールドで確かめる事の大切さなど、ゼミの中で多くの事を教えていただき、学ばせていただきました。また、先生のお宅で長良川の花火を見て、ご飯を食べた事を今でも鮮明に覚えております。先生から教わった事を生かし、残りの大学生活はもちろん、これからの社会で活躍できるように精進していきたいと思っています。先生の御冥福をお祈り申し上げます。

(山崎ゼミ所属)

都築 尚子

山崎先生は折々に病状を知らせてくださっていました。知らせの終わりには必ず、「復職する」「退院する」など前向きな言葉がありました。生きることへの強い信念を感じていました。見舞いは遠慮するとの内容も知らせにはありましたが、そろそろ様子を伺いに行っていていかしらと考えていた矢先の訃報でした。

訃報をうけてしばらくは、「先生、まだまだはやすぎますよ」と何度もつぶやいては浮かんでくる思い出に、悲嘆にくれることもありました。

私は、ゼミ生ではないのにゼミに参加してご指導していただいていたいました。調査で各地をご一緒させていただきました。厳しく・容赦ない勉強会のあとは、一変、豪快な笑いのたえない飲み会にうつり、楽しく、有意義な時間を過ごしました。先生のご自宅でひらかれた花火大会の鑑賞会は、本当に楽しく、卒業後も参加していました。

頭には沢山の事柄が浮かぶのに、書こうとするとまとまりません。今はまだ、ただただご冥福をお祈りすることで精一杯です。山崎先生、本当にありがとうございました。

(2001 年卒業、第 1 期生)

橋本 竜一

私は、2015年4月に岐阜大学大学院に入学し、以降2年弱の間、山崎先生にご指導いただきました。一言で振り返るならば、その間、先生は常に走り続けていた、そんな印象が残っています。それは言い換えるならば、学問に対して常に真剣な姿勢で向き合っていたということだと思います。だからこそ、研究意欲やアイデアが絶えず、それを追いかけていた、そんなふうには見えていました。

また、座学と実地調査の両立というのが先生のスタイルでした。大学内における座学では、学問への熱意のあまり時に厳しい指導をいただくこともありました。同時に、調査に赴いた際は先生が、調査に関わった方々とお酒を飲む姿が定番となっていました。そのような酒盛りに参加して、調査だけでは分からない側面をかいま見ることができると私は感じていました。先生としては単純にお酒を飲むのが好きだけなのかもかもしれません。

私の卒業論文作成にあたって先生は、ご自身が入退院を繰り返す状況の中、最後まで主査を務めようとしてくださり、結果的に、心配ばかりかけることとなってしまいました。完成したものを先生に読んでいただくことはできませんでしたが、多くのご助力により無事に論文を書き上げられたことが、ほんのわずかでも先生への恩返しになることを願っています。

(大学院 15 期生)

松井 隆浩

山崎先生には、学生時代では課外活動へのご協力、日常の講義から卒業研究までのご指導、進路・就職活動に対するアドバイスと、多岐に渡りお世話になりました。就職後はともに郡上市和良町で地域活動に取り組みました。そして現職では日本村落研究学会の開催など、様々な場面でご一緒させていただきました。恩師と共に仕事をできたことは、私の大きな誇りとなっています。

先生にお会いしなければ、今の仕事に就くことはありませんでしたし、新しい世界に触れる機会も少なかったと思います。先生にはもっとご指導いただきましたですし、新しい取り組みをしたかったです。ご教授いただいたこと、活動した軌跡を大切に、奮迅して参りたいと思います。

ドイツでの研究生生活の話を経験した機会がありました。その度にドイツのおもしろさを感じておりました。先生と共にドイツビールで乾杯できたらと思っておりましたが残念です。多大なご恩をいただいたと強く感じております。山崎仁朗先生、長年に渡り本当にありがとうございました。

(卒業生、郡上市役所)

森下 祐衣

謹んでお悔やみ申し上げます。

私はゼミ生として、山崎先生と郡上市の中山間地域に聴き取り調査に行ったり、公民館

での車座会議に出かけたりと、いろんな活動をご一緒させていただきました。山崎先生が地域の方々と笑い合う姿がついこのあいだのこのように思い出されます。

そんな先生のお姿をもう拝見することはできないと思うと、言葉では言いあらわせない気持ちでいっぱいです。

今まで親身なご指導と、たくさんの温かい思い出をありがとうございました。山崎先生のご冥福を、心からお祈り申し上げます。

(山崎ゼミ、2016年卒業生)

矢田 宏昌

山崎先生は研究に関して大変厳しい先生でした。同時に研究にかける情熱は、学生の私達の記憶にも強く残っており、一人の人間が一生をかけて一つのことを追求していくという「人生観」を、ご自身のお姿で示していただいていたのだなぁと近年改めて感じていました。

私が卒論指導を受けていた頃には、自転車通勤で携帯電話も持たないというマイペースな先生でしたが、一方で、ゼミ生や調査にご協力頂いた皆さんとの懇親会などでは、お酒を飲んで楽しそうにお話になっている先生のお姿が思い出されます。

自分の信念を貫きながら、人の信念も受け入れて社会の一員として生きていくことがどれだけ難しい事を、私も自分が社会に出て痛感しました。

山崎先生には、まだまだ人生について教えて頂きたい事ばかりでしたが、山崎先生は、ご自身の人生を全力で生き抜かれた事と思います。山崎先生、お疲れ様でした。私たちは山崎先生から教えて頂いたことを忘れません。本当にありがとうございました。

(白檜・山崎ゼミ OB)



川辺町の皆さん、学生と一緒に（矢田さんの長昌禅寺で）

ドイツより（山崎仁朗さんへの追悼記事）

ベルント・ヴァーグナー 日本からの手紙

日本・岐阜の山崎仁朗教授を覚えていらっしゃるか、読者の皆さんにお尋ねするのはこれが2回目となります。新年を迎える少し前に、私は山崎さんから久しぶりに手紙を受け取りました。文箱を調べてみて、山崎さんとおつきあいが長年にわたるものであることを、あらためて認識した次第です。

オルデンフェルデ新聞の当時の編集長であったディトマー・メラーを山崎さんが訪ねたことから、交際が始まりました。庭で私たちはハンブルグの市民協会活動に関する最初の話し合いを持ちました。

それは2001年のことでした。私はそのことについてオルデンフェルデ新聞に記事を書き、日本人の社会学教授が私たちの行政構造に精通していることに驚嘆の意を表しました。

それから10年、山崎教授は私たちを改めて訪問してくれました。山崎さんは、生ビールのみならずラップスカウス（訳者注：ハンブルク名物のミンチ肉とジャガイモ料理）も試したオルデンフェルデのレストランでの楽しい夕べのことを、熱く語ってくれました。

2014年、私は郷里の山崎さんを訪ねました。

彼は私のために、短期間に日本社会への深い洞察へと導いてくれるプログラムを作ってくれました。本物の寿司がどのような味であるかを知ることにもなりました。

その時より私たちは親友になったと言えるでしょう。その後長らく、彼からの便りがありませんでしたので、去年のクリスマスにカードを送りました。

返信は喜ばしいものではありませんでした。山崎教授はガンを患っていたのです。2度目の大変費用のかかる手術で、彼は片方の眼を摘出しなければならなかったのです。

山崎さんの優れたドイツ語から察するに、その治療法はまだ効果をもたらしていないとのことでした。

彼に宛てての最後の手紙で、私たち市民協会一同からのお見舞いの言葉を伝えました。それは単なる意思表示に過ぎなかったのですが、私はそれが仁朗さんにとってとても多くのことを意味するとわかっていました。

今年3月3日、日本からの手紙を再び受け取りました。差出人の名前に心当たりがありませんでした。山崎さんのご伴侶である松下さんが、夫の名字を名乗っていないということに失念していたからです。

松下さんは、「私たちの」山崎仁朗教授が、幾度にもわたっての手術を受けたにもかかわらず、重篤であったガンを乗り越えることができなかったことを知らせてくれました。1月8日に、山崎さんは亡くなったとのことでした。

山崎夫妻の友人である、岐阜に居住し働いているドイツ人夫妻が、私たちの言語に訳してくれた松下さんの手紙の一部を、ここに引用させていただきます。

「彼はドイツの友人と知人の方々にクリスマスの祝詞を送りたがっていました。彼自身が綴った言葉を私が印刷しお送りしました。私の夫は、再びドイツに行くことを切望していましたが、それを叶えることはできませんでした。彼はそのことを大変残念に思っていました。

皆さまが彼にお示しくださったご厚情と、彼の研究活動におけるご支援に、心よりお礼申し上げます。本当にどうもありがとうございました。」

ひとりの日本人教授をめぐる17年間の物語は、特筆すべきものです。私たちの言語・

歴史・文化への彼の並々ならぬ関心は、あらゆる日本人が共に抱くものではないからです。他方、私たちは、彼の質問に対しての当時の単純な回答で済ましてしまうことができるでしょうか。

このように年月を経て、心からの関係が構築されました。相手に対する関心が相互のものであり、遠く離れていても、また文化的な相違はあっても、その関心が続いていたからです。

仁朗さんがいなくなって、私たちは本当に寂しくてたまりません。

「オルデンフェルダー・ブラット」(オルデンフェルデ新聞) 158号
2017年6月17日 社団法人 オルデンフェルデ市民協会 発行



Berndt Wagner zu Gast in Japan

「ひとりの人間が世界に与えた善なるものは、決して失われない。」

(アルベルト・シュヴァイツァー)

ニュールンベルクの市民および近郊協会の良き友であった山崎仁朗教授の訃報に接し、深い哀しみでいっぱいです。2017年1月8日、山崎さんは重篤なガンのため亡くなり、私たちのみならず多くの人々にとって、あまりにも早くこの世を去ってしまいました。山崎教授は日本の岐阜大学「地域科学部」の社会学者でした。山崎さんは、とくにニュールンベルクとオルデンプルクの市民および近郊協会をケーススタディーとして、ドイツの市民参加に関する研究に取り組んでいました。彼の知識への渴望は決して止むことはありませんでした。とりわけ私たちの市民協会メンバーとの再会を果たし、研究テーマにおけるインタビューをおこない、彼らとともにドイツの生活様式を堪能するために、ほとんど毎年のようにドイツを訪れました。山崎さんは病気に苦しんでいた間も、ライフワークを続行するために、再三再四、大学に復帰しました。山崎教授がニュールンベルクを訪れてくれたことは、私たちにとって本当にありがたいことでした。ニュールンベルクの市民および近郊協会から、山崎さんは大いに尊敬され認められていました。私たちは山崎さんのことを決して忘れることはないでしょう。ご遺族の方々に、心よりのお悔やみを申し上げます。



「ヴェスト・インフォ」
2017年1月号
社団法人 ニュールンベルク
西市民協会発行

追悼文 山崎 仁朗教授の逝去について

2016年12月12日、私たちは山崎教授から楽しいクリスマスと2017年の佳き新年を祈念する手紙を受け取りました。

しかしながら、私たちは同時に、2000年の発足以降、社会学者として社団法人ハーゼンブック市民協会を学問的に支えてくれていた山崎さんの病気について、直近の状況を知ることとなったのでした。山崎教授は、日本の岐阜大学「地域科学部」に勤めており、重点的なテーマとしてドイツの市民参加に関する研究に携わっていました。長年にわたって、このつながりから、私たちは山崎さんを客人としてのみならず友人として歓迎してきました。

山崎教授が2017年1月8日に亡くなったことを知らされ、私たちは狼狽せずにはいられませんでした。協会活動における学問的の同伴者としてのみならず、個人的な友人として、私たちは山崎さんのご逝去を心より悼んでいます。

ご伴侶の松下光子さん、山崎さんの妹さん、ご親族の皆様、心よりお悔やみ申し上げます。

私たちは、多大の敬意を表し、いつまでも変わらず忘れることのない友人を喪ってしまいました。

「ハーゼンブック・ナーハリヒテン」(ハーゼンブック通信) 2017年春夏号
社団法人 ニュールンベルク・ハーゼンブック市民協会 発行

(以上、林 正子記)



(写真には山崎さんとともに、社団法人ニュールンベルク・ハーゼンブック協会の幹部が写っています。)

ご家族

山崎 智子

子供時代の兄貴はと言いますと、当時の近所の遊び仲間の中では年長で、体つきも大きい方だったので、ガキ大将という程ではないのですが、まあ中心的な存在ではありました。

子供にしては物知りで口がたつたのと、我々年下の連中の面倒見も割と良かったので、少なくとも小学校低学年くらいまでは自分たちも後をついて回ってよく遊んでもらっていた気がします。そんな様子を見ていた近所のおばさんに「キミちゃんは大きくなったらきっと先生になるね」なんて言われたことを本人も覚えていて、親の法事の親戚の集まりなどの酒の席で「本当にセンセイになったね〜」何て会話をしていたのを記憶しています。

もっとも自分が小さい頃に兄貴に教わったことで覚えている事といえば『チャップリンのお母さんの名前は「ママプリン」、おばあちゃんの名前は「ババロア」』何ていう、しょうもないウソばかりですが……。

兄は小さい頃から乗り物好きで、そのなかでも鉄道に乗って旅行するのが好きだったようです。小学生の頃から、乗り換え無で行ける父方の野田の親戚の家はもちろん、母方の長野の親戚の家にも一人、もしくはチビの自分を連れて親の同行無で遊びに行ったりしていました。中学生になると当時の「国鉄」のキャンペーン「チャレンジ 20000 キロ」に挑戦し、あっという間に達成してしまったようです。一人で出かけて行くこともありましたが、友達と一緒に行くときには兄貴がスケジュール等を組んで、友達の親御さんに渡してお出かけの了解をいただいたりしていたみたいです。

基本的には真面目な方だったのでしょうか。子供の頃から遊びにしろ、勉強にしろ、自分で興味を持った事やこうと決めた事に対しては、のめり込んで真剣に取り組むタイプの人だったようです。発病してしまっても、良いと勧められたことはきちんと行い、ダメだと言われた生活習慣などは改めて、辛い治療や2度もの大手術にも耐えて、とにかく1日でも早く復帰するのだと、本当に頑張っていました。今までの人生、そんな風に自分の頑張りで色々な事柄も乗り越えてきたのだと思います。

再発で左目をあきらめなくてはならないと言われた時も「右目は見えるのだし、命まで取られる訳じゃあるまいし……」とある意味自分自身にも言い聞かせて頑張っていたのに、元気になったらやりたい事なども書き留めたり、言葉に出したりして、病状が辛い時も何とか気持ちを前向きにして努力していたのに。。。本当に悔しいです。未だに信じられず悪い夢でも見ている気がしています。

突きつけられた現実は何れにも酷く、本人にしても簡単に受け入れられるものではないでしょうが、このように皆様が兄の思いを汲んで、色々な場面で偲んでいただけることが、救いになっていると思います。本当にありがとうございます。

これからも呑み会の席の思いで話の中などには、兄も時々参加をさせていただければ幸いです。

(山崎さんの妹さん)

松下光子 次の世代につなぐ

私は、彼の旅立ちについて、1つのイメージをもっています。それは、木々の間にあった太くて大きな木が、突然静かに倒れた、というものです。その木は、太さがあってずっと高く伸びていると思っていました。しかし、ある時突然、その木は、静かに、倒れました。その木は、横に倒れると、太さはとても大きいのですが、長さはずっと高く伸びているわけではなく、丸太のように途中で切れた形になりました。ああ、太くて大きいけれども、高く伸びているわけではなくて、思ったよりも短いんだなあと思いました。その丸太のように横になった木を見ていると、その倒れた木から、新しい芽がたくさん出てきます。新しい芽は、倒れた木とその木が朽ちて大地と一体になったところから栄養を得て、どんどん大きく伸びていきます。その倒れた木から伸びていく若い芽は、倒れた木が育てた人たちなのだなあと思いました。

山崎仁朗という大きな木は倒れましたが、その木は次の世代の栄養となり、たくさんの新しい芽が伸びて若い木となり、森や大地を、社会を支えていってくれると思います。

(山崎さんのパートナー)



略歴

1965 (昭和 40) 年 7 月 24 日	千葉県柏市で生まれる	1 歳 4 ヶ月の頃
1978 (昭和 53) 年 3 月	柏市立藤心小学校卒業	
1981 (昭和 56) 年 3 月	柏市立土中学校卒業	
1984 (昭和 59) 年 3 月	千葉県立東葛飾高校卒業	
1985 (昭和 60) 年 4 月	名古屋大学文学部入学	
1989 (平成元) 年 3 月	名古屋大学文学部哲学科卒業	
1989 (平成元) 年 4 月	名古屋大学大学院文学研究科博士課程前期課程社会学専攻入学	
1992 (平成 4) 年 3 月	同上、修了	
1992 (平成 4) 年 3 月	同上、博士課程後期課程社会学専攻入学	
1994 (平成 6) 年 3 月	同上、中途退学	
1994 (平成 6) 年 4 月	名古屋大学文学部助手 (社会学)	
1994 (平成 6) 年 4 月	岐阜大学教養部非常勤講師 (社会学、同年 9 月まで)	
1997 (平成 9) 年 4 月	岐阜大学地域科学部専任講師	
1999 (平成 11) 年 10 月	同上、助教授 (2007 年より准教授)	
2013 (平成 25) 年 4 月	同上、教授	
2017 (平成 29) 年 1 月 8 日	逝去	



教育

「社会学入門」「現代のまちづくりと住民」(全学共通教育)、「地域研究入門」「地域社会学」「地域自治論」「社会調査法Ⅱ」「地域学実習」「専門セミナー」(専門教育)、「地域社会学特論」「特別演習」「特別研究」(大学院)などを担当

学内業務

教務厚生委員会、カリキュラム検討委員会の委員長を歴任

社会活動

多治見市持続可能な地域社会づくり政策研究会委員(2003～2007)、岐阜市住民自治基本条例検討委員会委員(2006～2007)、御嵩町産業廃棄物処分場計画地利用指針検討委員会委員(2008～2010)、岐阜市市民活動支援事業審査委員長(2010～2015)、岐阜小学校学校運営協議会会長(2010～2016)、可児市まちづくり審議会委員(2002～2016)など

学会活動

日本社会学会、関西社会学会、地域社会学会、コミュニティ政策学会(編集委員長)、日本村落研究学会、東海社会学会(研究企画委員長)

研究業績

著書

- 「地場産業都市」から「中濃圏域」における「交流文化都市」へー岐阜県関市ー（山崎仁朗・魯富子・井上治子）、北川隆吉・貝沼 洵編『地方都市の再生』アカデミア出版会、161-220,1997
- 地域コミュニティと公共性、中田 実編『地域共同管理の現在』東信堂、67-79,1998
- 地域づくりと住民自治、松田之利・西村 貢編『地域学への招待』、80-95、2009
- ドイツ、中田 実編『世界の住民組織：アジアと欧米の国際比較』自治体研究社、181-214、2000
(Community based Organizations in Germany : the local representative system, in Nakata, M. ed. Building Local Democracy : a sociological study of community-based organization among eleven countries, 187-212, Jichitai-Kenkyusha. 同書の英訳)
- 富樫幸一・合田昭二・白樫 久・山崎仁朗『人口減少時代の地方都市再生：岐阜市にみるサステナブルなまちづくり』古今書院、2007
- 白樫 久・山崎仁朗・今井 健編『中山間地域は再生するか：郡上和良からの報告と提言』アカデミア出版会、2009
- 山崎仁朗・宗野隆俊編『地域自治の最前線：新潟県上越市の挑戦』ナカニシヤ出版、2013
- 山崎仁朗編『日本コミュニティ政策の検証：自治体内分権と地域自治へ向けて』東信堂、2014

論文

- 笠原町における家族と地域、名古屋大学文学部社会学研究室『笠原町の地場産業とまちづくり：21世紀をめざして』、25-39
- J. ハーバマスにおける「労働」と「相互行為」の位置づけをめぐる：「市民的公共性」をどう考えるか、名古屋大学社会学論集、14、1-26、1993
- 公共性の今日的位相、名古屋大学社会学論集、15、251-279、1994
- 東ドイツ地域における住民自治組織の再建：チューリンゲン州の〈集落制度〉、名古屋大学社会学論集、18、33-62、1997
- J. ハーバマスにおける「コミュニケーション権力」概念について、名古屋大学社会学論集、20、195-215、1999
- ドイツの市民団体について：比較地域自治論のための試論、岐阜大学地域科学部研究報告、12、27-52、2003
- 住民の社会関係とむらづくり意識、農業生産を基盤とした中山間地域の総合的活性化方策と農協の役割：岐阜県高鷲村を対象とした実証研究、協同組合奨励研究報告、29、119-125
- オスナブリュック市における近隣自治機構の再編、地域科学部研究報告、16、139-169、2005
- コミュニティ施策の構想と展開（牧田実・山崎仁朗）、自治省モデル・コミュニティ地区の事例検討（山崎仁朗・谷口功・牧田実）。コミュニティ政策、5、31-53、39-82、2007
- Warum wurden die Osnabrucker Ortsrate abgeschafft? Hinweise für das Stadtteilautonomiesystem in Japan、岐阜大学地域科学部研究報告、24、117-134、2009
- 地方公共団体におけるコミュニティ施策の展開：旧自治省調査の再分析、岐阜大学地域科学部研究報告、27、81-103、2010
- 特集 東海社会の『地域力』を問い直す 特集に寄せて、東海社会学会年報、2、5-6、2010
- オスナブリュック市における地区評議会の廃止と市民フォーラムの導入：地域自治をめぐる考察、岐阜大学地域科学部研究報告、28、113-134、2011
- 旧自治省コミュニティ地区の成果と課題：「アンケート調査」結果から、岐阜大学地域科学部研究報告、28、135-160、2011
- 「住民投票」後、御嵩町はどうなったのか？（柳川善郎・山崎仁朗）、東海社会学会年報、3、7-18、2011
- コミュニティの制度化の社会的意義に関する考察：広島県旧五日市町を事例に、地域社会学会年報、24、83-96、2012

鈴木榮太郎における「自然」と「行政」：「地域自治の社会学」のための予備的考察、社会学評論、63（3）（通巻251）、424-438、2012

エアフルト市における地区協議会の実態：地域自治の比較社会学の試み、東海社会学会年報、5、71-82、2013

ニュルンベルク市の市民団体について：「コミュニティの制度化」のもうひとつのかたち、岐阜大学地域科学部研究報告、34、97-150、2014

エアフルト市における地区協議会の実態：地域自治の比較社会学の試み、東海社会学会年報、5、71-82、2013

地域協議会と合併旧市町村（特集 合併旧市町村の行方）、ガバナンス、176、21-23、2015-12

鈴木榮太郎における自然村理解の転回過程について、村落社会研究ジャーナル、22（1）（通号43）、37-46、2015

翻訳と資料紹介

クラウス・ムリュネック「ナチ時代におけるハノーファー市の市民団体の強制的同一化」（『ハノーファー歴史雑誌』34巻、1980年、所収）、岐阜大学地域科学部研究報告、33、65-102、2013

チューリンゲン州とエアフルト市における地域自治に関する法的規定、岐阜大学地域科学部研究報告、32、105-123、2013

鈴木榮太郎：病床雑筆（第1部）、岐阜大学地域科学部研究報告、39、11-25、2016

鈴木榮太郎：病床雑筆（第2部）、村落社会研究ジャーナル、21（2）（通巻42）、35-46、2016

学会報告要旨

コミュニティの国際比較、コミュニティ政策学会第6回大会報告 第2分科会、コミュニティ政策、6、171-173、2008

旧自治省コミュニティ施策検証プロジェクト報告部会、コミュニティ政策、10、170-171、2012

問題提起：コミュニティ政策を改めて問い直す シンポジウム 地域自治を促すコミュニティ政策とは何か：地域自治区の実態から考える、パネルディスカッション、コミュニティ政策、11、5-7、28-50、2013

自治体内分権・地域自治についての社会的アプローチ（ラウンドテーブル2 新しい地域論に必要な論点をめぐって、経済地理学会第61回大会）、経済地理学年報、60（4）、80、2014

「中山間地域コミュニティ」分科会報告、コミュニティ政策、14、143-144、2016

書評

マーク・ポスター『情報様式論』、社会と情報、1、89-93、1996

名和田是彦著『コミュニティの法理論』、社会学評論50（1）、126-128、1999

佐藤慶幸『NPOと市民社会』日本地方自治学会『自治制度の再編戦略』、221-226、2003

玉野和志著『東京のローカル・コミュニティ—ある町の物語 1900—80』、コミュニティ政策、4、174-177、2006

貝沼洵『共に生きることは可能か—社会の終焉を超えて』、東海社会学会年報、2、131-133、2010

吉原直樹『コミュニティ・スタディーズ』作品社、地域社会学年報、159-160、2012

書評リプライ：コミュニティ施策のあり方を考える：広原盛明氏の書評にこたえて、東海社会学会年報、8、180-184、2016

岐阜関係の報告書・論稿

飛騨家具研究会報告（1998）飛騨家具の現状と課題について、（財）岐阜県産業経済研究センター「岐阜地域」のまちづくりを考える -- アンケート調査結果から、十六銀行経済月報、554、13-18、2000-08

郊外住宅団地の今後、十六銀行経済月報、587、38-42、2003-05

山崎仁朗（2002）「近隣政府」の可能性と課題、自治研ぎふ、72、2-5

ぎふまちづくりセンター（2003）芥見東校区アンケート調査報告書（下水処理場跡地利用についてのアンケート）

岐阜県若者の政策提案促進事業（2003）岐阜市の古い街・金華地区 景観・町屋・職人に関する調査と提言

金華一二三会（2010）わたしたちの子供の頃の金華の町

ぎふまちづくりカレッジ実行委員会（2004・5）平成16・17年度ぎふまちづくりカレッジ活動記録

岐阜市企画部総合政策室・岐阜大学地域科学部（2007）岐阜市総合計画策定のための市民意識調査報告書

岐阜市企画部総合政策室・岐阜大学地域科学部（2012）岐阜市総合計画策定に係る市民意識調査・市民討議会報告書

岐阜市市民参画政策課・岐阜大学地域科学部（2011～15）ソーシャル・キャピタル研究支援業務成果報告書

（平成22～26年度）

科学研究費報告書

「地場産業都市」の基本構造：「産業」「政治」（27-41）、「地場産業都市」への胎動（105-111）、「共生と交流」の時代における都市政治に関する社会学的調査研究：岐阜県関市、平成4年度科学研究費補助金研究成果報告書、1993

「テクノポリス構想」と商業集積の再編（298-310）、浜松市における「開発」と「統合」のメカニズム（311-314）、「共生と交流」の時代における都市政治に関する社会学的調査研究：地方都市における「開発」と「社会統合」をめぐる、平成6年度科学研究費補助金研究成果報告書、1995

ドイツの住民組織（163-200、解題と翻訳）、住民自治組織の比較研究資料集、平成7～8年度科学研究費補助金成果報告書

北海道の開発行政における国・自治体関係の特徴と変容（79-92）、現代地方都市における「ローカルな調整様式」の社会学的調査研究、平成10年度科学研究費補助金＜基盤研究（B）（1）＞研究成果中間報告書、1999年3月、研究代表者：貝沼 洵（名古屋大学）

地域計画の変遷（瀬戸市）（20-31）、ボランティア・アソシエーションの可能性と課題（109-114）、現代地方都市における「ローカルな調整様式」の社会学的調査研究、平成11年度科学研究費補助金＜基盤研究（B）（1）＞研究成果中間報告書、2000年3月、研究代表者：貝沼 洵（名古屋大学）

北海道の開発行政における国—自治体関係の特徴と変容（100-113）、現代地方都市における「ローカルな調整様式」の社会学的調査研究、平成12年度科学研究費補助金＜基盤研究（B）（1）＞研究成果中間報告書、2001年3月、研究代表者：貝沼 洵（名古屋大学）（1999年報告書と同じ内容）

中山間地域をめぐる現状・研究の総括と本研究の位置（1-11）、A市B町の基本構造（12-22）、集落と世帯・家族の基礎構造（31-43）、中山間地域の総合的定住条件：成果と課題（195-206）、中山間地域における地域社会構造の総合的研究：過疎化・高齢化時代のモデルを求めて、平成17年度科学研究費補助金研究成果報告書、2006

コミュニティ政策による＜地域自治＞の促進に関する社会学的調査研究、科学研究費補助金（基盤研究（C））、研究期間：2008年-2011年 代表者：山崎 仁朗

「コミュニティの制度化」と地域自治の比較社会学的研究、科学研究費補助金（基盤研究（C））、研究期間：2013年-2016年 代表者：山崎 仁朗

専門セミナー生の卒業論文（年度別）

2001	花田康仁	軽種馬生産の構造と課題 —北海道日高支庁静内町を事例に—
2001	小林政晴	地域社会形成と芸術活動 —岐阜県美濃市を事例として—
2001	田中幸恵	子どもの生活とそれを取り巻く環境 —児童館・学童保育を通して—
2001	河田久未子	都市インナーエリアにおける再開発とコミュニティ形成のあり方に関する研究 —岐阜市日ノ本地区を事例として—
2002	味岡正樹	市町村合併による規模拡大と住民自治の課題 —岐阜県山県郡3町村合併を事例に—
2003	片桐智之	高齢化をむかえる地域におけるまちづくり —福祉コミュニティの視点から—
2003	高田友理子	郊外住宅団地におけるまちづくりとその課題 —岐阜市芥見東校区を事例に—
2003	矢田宏昌	混住地域における農村的社会の存在意義 —岐阜市大洞地区における変化と継承をもとに—
2004	今村文枝	農山村におけるグリーン・ツーリズムの展開とその意味 —長野県飯田市を事例に—
2004	吉田由佳理	中山間地域における高齢者の車依存と日常生活 —郡上市和良町を事例に—
2004	吉澤麻里	高齢者の生活からみる地域福祉の可能性 —岐阜市金華地区を事例に—
2004	嵐めぐみ	女性の「主体性」に関する考察 —和良加工生産組合を事例に—
2004	吉田理恵	伝統的な地域における新しい商業の可能性と課題
2005	猿渡達彦	コミュニケーションメディアの展望 —ウェブログから見る人とのつながり—
2005	堀 泰徳	日本におけるコミュニティ・ビジネスの考察 —和良加工生産組合を事例に—
2005	渡部佳名子	まちづくりのリーダーにみる主体形成過程
2005	森 建輔	公共サービス供給における行政と地域住民自治組織の役割分担 —路線バスサービスの担い手の考察を通して—
2006	深谷昌代	組織内部からみた市民団体の発展性についての一考察 —岐阜市「水うちわプロジェクト」を事例に—
2006	安藤あゆみ	総合型地域スポーツクラブの地域コミュニティ形成への役割 —岐阜県の総合型地域スポーツクラブを事例に—
2007	神谷将之	格差社会においてどのような能力が認められているか —本田由紀の議論を中心とする考察—
2007	長谷沙織	教師への信頼の揺らぎに関する一考察 —中学生新聞の投稿欄を用いて—
2007	奥岡咲帆	若者の消費にみる主体性 —流行と携帯電話の使用にみる消費行動—
2007	河地磨諭	まちづくりにおける企業の果たす役割 —岐阜県一地方銀行を例にして—
2008	藤川ひとみ	階層による食生活と食に対する満足度の違い
2008	森奈津子	非農業者の農業への関わり —市民農園の事例から—
2009	二宮朋美	脱青年期における居住形態 —親と同居する成人未婚者に関する一考察—
2009	渡邊 亮	他者のまなざしの中を生きる社会
2009	野村友里江	「社会的性格」をめぐる議論の歴史的展開に関する研究 —現代日本の「社会的性格」を考える素材として—
2010	松井隆浩	地域ブランドの取り組みにおける当事者意識の差 —「各務原キムチ」を事例に—
2010	山下翔太郎	市民からみたプロサッカークラブの地域での存在意識 —FC岐阜を事例として—
2010	福田陽平	外国人との共生のための地方自治体と民間団体との連携 —美濃加茂市を事例として—
2011	田中慎太郎	地域生活を支える流通のあり方
2011	近藤はる菜	持続可能性のある観光まちづくりの現状 —長良川おんぱくを事例に—
2011	浅野敦子	ドイツの豊かさの背景にあるもの —人々の意識・価値観の実態—
2012	前川綾香	名古屋はなぜ観光地になれないのか —観光まちづくりの可能性と課題—
2012	小島友花	ベッタウン化が進む都市における地域ブランドの役割 —愛知県一宮市を事例に—
2012	谷合俊明	学生が地域で就職をすることに親の意識 —岐阜県の状況—
2012	辻 雄樹	孤独死を防ぐための地縁・血縁の再構築 —岐阜市三田洞団地を事例に考える—
2012	橋田佳奈	女性の感性がまちづくり活動に与える影響 —長良川おんぱくを事例に—
2012	田中愛華	B級ご当地グルメによるまちおこし —岐阜県池田町を事例に—
2012	浅野敦子	ドイツの豊かさの背景にあるもの —人々の意識・価値観の実態—
2014	山田百香	大卒女性の就労意識と中小企業
2014	垣見侑輝	中山間地域の内発的活動による今後の展望 —岐阜県郡上市和良町を事例に—
2014	入江朱美	社会的な接点を失った若者に対する総合的な支援について —名古屋市を事例に—
2014	大坪夏希	Iターン移住者からみる地域存続の可能性 —岐阜県郡上市明宝を事例に—
2014	大野綾子	若者の地元意識 —岐阜市を事例に—
2014	牧野友紀	インターネットを使った高齢者見守りシステムの導入をきっかけとする集落存続の可能性—岐阜県郡上市を事例に—
2015	浅野有香	持続可能なまちづくりと岐阜市の交通 —自動車依存から公共交通利用へシフトするためには
2015	森下祐衣	中山間地域における買い物事情 —買物弱者問題について考える—
2015	大竹隆志	都市部と中山間地域の老後の暮らし方 —名古屋市と郡上市を例に—

大学院指導院生の修士論文

2002	森 由貴	市町村合併の歴史的展開に関する実証研究
2009	石原寛也	現代社会におけるハレの多様性と選択について
2012	HASIS SUMIN	中山間地域を維持・存続させる主体としての他出子の可能性に関する研究
2014	BAOLURI	若者の地方志向について中日比較研究
2016	橋本竜一	再生可能エネルギー発電を地域主体で事業化するために必要なもの ―飯田市上村の事例を通して―

岐阜大学地域科学部・地域学実習報告書（山崎さんが関わった調査）

年度		山崎さんの主な担当章
1999	平田町におけるまちづくりの現状と課題	
2000	都市近郊農村の構造分析	
2000	岐阜市中心市街地調査Ⅰ－徹明校区	第4章 中心市街地のコミュニティ
2001	岐阜市中心市街地調査Ⅱ－金華・京町・明徳校区&日ノ本・鶯飼屋	第4章 中心市街地のまちづくりⅢ：日ノ本地区、第1章 金華（白樫・山崎）
2002	岐阜市市街地調査Ⅲ－岐阜駅周辺再開発・金華校区・芥見東校区	Ⅲ 郊外住宅団地におけるまちづくり－芥見東校区－（山崎・高木）
2003	岐阜市市街地調査Ⅳ－金華地区・大洞地区・加納地区	第1章 川原町調査（山崎・富樫）、第3章 郊外住宅団地におけるまちづくり～芥見南緑山地区において～、第4章 旧大洞地区聞き取り調査
2004	岐阜市市街地調査Ⅴ－金華地区・大洞地区・柳ヶ瀬・美殿町	第1章 金華地区で新たに開業した商店の実態調査 第2章 金華地区の高齢者調査（わいわいハウス金華）
2005	岐阜市市街地調査Ⅵ－福井県今立町調査－岐阜市柳ヶ瀬商店街・都心再開発	第3章 福井県今立町における地域福祉とまちづくり（高木・山崎）
2006	岐阜市調査Ⅵ－黒野地区・岐阜圏域に立地する企業の職場調査	6. 黒野地区の社会生活
2007	岐阜市調査Ⅶ－黒野地区調査2・岐阜圏域に立地する企業の職場調査2	4. 団地地区：第二千成団地
2008	岐阜市調査Ⅸ－まちなか居住調査・岐阜圏域に立地する企業の職場調査3	4. 伝統地区：金華（山崎・合掌・高木、町家に住む人たち）
2009	岐阜市調査Ⅹ－まちなか居住（市営住宅・京町・金華）・岐阜圏域に立地する企業の職場調査4	4. 金華地区（山崎・合掌、空き家調査）
2010	岐阜市調査Ⅺ－三田洞・黒野市営住宅調査、島地区と市民グループ調査	3. 岐阜市における市営住宅団地の現状と課題－三田洞団地の事例（高木・山崎）
2011	岐阜市調査Ⅻ－早田・鶯飼屋・川原町、長良ブドウ、田神住宅、日ノ本町、インターンシップ	5. インナーシティ地区で暮らす－岐阜市日ノ本町（合掌・山崎）
2012	地域学実習報告書13－長良ぶどう・芥見東・長良川おんぼく・古民家・岐阜市竹鼻・インターンシップ	2. 大洞調査（高木・山崎）
2013	地域学実習報告書14－岐阜市：松籟団地・古民家、大垣市・羽島市・白川郷・インターンシップ	1. 岐阜市松籟団地（高木・山崎）
2014	地域学実習報告書15－岐阜市・郡上市・大垣市／垂井町・白川郷・インターンシップ	3. インターネットを介した見守りシステム（KIZUKI）の導入をきっかけとするコミュニティ再生の可能性と課題－岐阜県郡上市の事例（山崎・高木）
2015	地域学実習報告書16－郡上市：IFP2015・多治見市笠原のタイル産地・企業や公的機関の職場に関する調査	3. 郡上市小那比地区グループ（山崎・高木）
2016	地域学実習報告書17－岐阜県岐阜市中心市街地・池田町・関ヶ原町・企業や公的機関の職場に関する調査	3. 山あい集落の暮らし・まちづくりに関する現状と課題（高木・山崎）

山崎仁朗さんを偲ぶ会

2017年9月30日

岐阜大学地域科学部